64-242
1200501278088
4
242

始

ㅋ 4F.91

岩倉具視關係文書

第五

昭和六・一・九 寄贈

64-242

岩倉具視關係文書第五

自明治四年正月
至同七年二月

目次

明治四年

一　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治四年正月十一日　一
二　岩倉具視書翰　「三條實美等宛」　明治四年正月十四日　二
三　岩倉具視書翰　「三條實美宛」　明治四年正月廿三日　六
四　岩倉具視書翰　「三條實美宛」　明治四年正月廿四日　八
五　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治四年正月廿四日　九
六　岩倉具視書翰　「三條實美宛」　明治四年正月廿七日　一〇
七　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治四年二月三日　一三
八　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治四年二月七日　一五

宮内省圖書寮

九　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治四年二月八日　一六
一〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治四年二月八日　一七
一一　木戸孝允書翰　「岩倉具視宛」　明治四年二月十日　一八
一二　井上馨書翰　「岩倉具視宛」　明治四年二月十二日　二〇
一三　岩倉具視書翰案　明治四年二月十五日　二二
一四　岩倉具視書翰　「黑田清綱宛」　明治四年二月十七日　二三
一五　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治四年二月十八日　二四
一六　中御門經之書翰　「岩倉具視宛」　明治四年二月十九日　二四
一七　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治四年二月廿七日　二七
一八　岩倉具視書翰　「島津久　宛」　明治四年二月　二八
一九　小河一敏書翰　「岩倉具視宛」　明治四年三月七日　三〇
二〇　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治四年三月十日　三四
二一　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治四年三月十日　三五

二二　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治四年三月十三日　三六
二三　德大寺實則書翰　「岩倉具視宛」　明治四年三月廿三日　三七
二四　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治四年三月廿六日　三八
二五　木戸孝允書翰　「岩倉具視・三條實美宛」　明治四年四月三日　四〇
二六　岩倉具視書翰　「三條實美等宛」　明治四年四月六日　四二
二七　岩倉具視書翰　「毛利元德宛」　明治四年四月十日　四三
二八　岩倉具視書翰　「木戸孝允宛」　明治四年四月十日　四四
二九　岩倉具視書翰　「三條實美宛」　明治四年四月十一日　四七
三〇　岩倉具視書翰　「三條實美宛」　明治四年四月十一日　四八
三一　岩倉具視書翰　「嵯峨實愛宛」　明治四年四月二十日　五一
三二　岩倉具視書翰　「澤宣嘉宛」　明治四年四月二十日　五一
三三　岩倉具視書翰　「嵯峨實愛宛」　明治四年四月廿二日　五二
三四　岩倉具視書翰　「三條實美宛」　明治四年四月廿三日　五四

三五　岩倉具視書翰　「三條實美宛」　明治四年四月廿三日　五六
三六　池田慶德書翰　「岩倉具視宛」　明治四年四月廿四日　五七
三七　岩倉具視書翰　「三條實美宛」　明治四年四月廿七日　五八
三八　岩倉具視書翰　「嵯峨實愛宛」　明治四年四月廿八日　六〇
三九　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治四年四月廿八日　六一
四〇　藤井九成書翰　「岩倉具視宛」　明治四年五月一日　六一
四一　岩倉具視書翰　「新納立夫宛」　明治四年五月八日　六三
四二　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治四年五月廿九日　六四
四三　副島種臣書翰　「岩倉具視・三條實美宛」　明治四年六月二日　六五
四四　伊達宗城書翰　「岩倉具視宛」　明治四年六月八日　六六
四五　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治四年六月十日　六七
四六　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治四年六月十五日　六八
四七　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治四年六月十六日　六九

四八　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治四年六月十九日　七〇
四九　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治四年六月廿九日　七一
五〇　池田德夫願書　「岩倉具視宛」　明治四年六月　七二
五一　岩倉具視書翰　「中御門經之宛」　明治四年七月一日　七四
五二　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治四年七月二日　七六
五三　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治四年七月三日　七七
五四　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治四年七月三日　八〇
五五　佐々木高行書翰　「岩倉具視宛」　明治四年七月三日　八一
五六　岩倉具視書翰　「吉井友實宛」　明治四年七月四日　八二
五七　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治四年七月五日　八三
五八　佐々木高行書翰　「岩倉具視宛」　明治四年七月五日　八三
五九　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治四年七月上旬　八四
六〇　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治四年七月十二日　八七

六一　岩倉具視書翰　「佐々木高行宛」　明治四年七月十三日　八七
六二　岩倉具視書翰　「佐々木高行等宛」　明治四年八月十日　八八
六三　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治四年九月四日　八九
六四　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治四年九月十二日　九〇
六五　岩倉具視書翰　「島津久光宛」　明治四年九月十三日　九一
六六　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治四年十月十六日　九三
六七　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治四年十一月八日　九四
六八　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治四年十一月廿七日　九五

明治五年

一　岩倉具視書翰　「鮫島尙信宛」　明治五年二月一日　九七
二　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治五年二月十五日　一〇〇
三　大原重實書翰　「岩倉具視宛」　明治五年二月廿一日　一〇二

四　大原重實書翰　「岩倉具視宛」　明治五年三月四日　一一三
五　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治五年三月十六日　一二〇
六　大原重實書翰　「岩倉具視宛」　明治五年三月二十日　一二二
七　大原重實書翰　「岩倉具視宛」　明治五年三月廿八日　一二五
八　佐々木高行書翰　「岩倉具視宛」　明治五年四月四日　一二七
九　大原重實書翰　「岩倉具視宛」　明治四年四月十四日　一二九
一〇　鮫島尙信書翰　「岩倉具視宛」　明治五年五月十三日　一三三
一一　大原重實書翰　「岩倉具視宛」　明治五年五月十五日　一三四
一二　吉井友實書翰　「岩倉具視宛」　明治五年五月十七日　一四〇
一三　戸田三郎等願書　「岩倉具視宛」　明治五年五月　一四一
一四　大原重實書翰　「岩倉具視宛」　明治五年六月十五日　一五〇
一五　岩倉具視書翰　「木戸孝允等宛」　明治五年七月十五日　一六一
一六　福地源一郎等書翰　「岩倉具視宛」　明治五年七月十七日　一六三

一七　岩倉具視書翰　「木戸孝允等宛」　明治五年七月廿一日　一六五
一八　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治五年七月廿八日　一六九
一九　大原重實書翰　「岩倉具視宛」　明治五年七月三十日　一七二
二〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治五年八月七日　一七四
二一　大原重實書翰　「岩倉具視宛」　明治五年八月十三日　一七五
二二　大原重實書翰　「岩倉具視宛」　明治五年九月三日　一八三
二三　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治五年九月十一日　一八七
二四　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治五年十月十日　一八九
二五　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治五年十月三十日　一九一
二六　岩倉具視意見書　明治五年十一月三日　一九三
二七　大原重實書翰　「岩倉具視宛」　明治五年十一月九日　二〇一

明治六年

一　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治六年一月六日　二〇九
二　大原重實書翰　「岩倉具視宛」　明治六年一月十二日　二一二
三　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治六年一月十三日　二二一
四　香川廣安書翰　「岩倉具視宛」　明治六年一月十三日　二二四
五　小河一敏書翰　「岩倉具視宛」　明治六年一月十八日　二二七
六　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治六年一月十九日　二三一
七　大原重實書翰　「岩倉具視宛」　明治六年一月廿四日　二三二
八　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治六年二月十日　二三五
九　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治六年二月十日　二三六
一〇　大原重實書翰　「岩倉具視宛」　明治六年二月十六日　二三八
參考　三條實美書翰　「東久世通禧宛」　明治六年二月
一一　大原重實書翰　「岩倉具視宛」　明治六年二月廿四日　二四九
一二　德大寺實則書翰　「岩倉具視宛」　明治六年二月廿八日　二五四

一三　德大寺實則書翰　「岩倉具視宛」　明治六年三月十五日　二五五
一四　大原重實書翰　「岩倉具視宛」　明治六年三月十五日　二五七
一五　岩倉具視書翰　「三條實美宛」　明治六年三月廿四日　二六一
一六　岩倉具視書翰　「三條實美宛」　明治六年三月廿六日　二六五
一七　香川敬三書翰　「岩倉具視宛」　明治六年四月三日　二六六
一八　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治六年四月廿二日　二六九
一九　大原重實書翰　「岩倉具視宛」　明治六年四月廿二日　二七〇
二〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治六年五月六日　二七七
二一　高辻修長書翰　「岩倉具視宛」　明治六年五月七日　二七八
二二　岩倉具視書翰　「三條實美宛」　明治六年五月十七日　二八〇
二三　西岡逾明書翰　「岩倉具視宛」　明治六年五月十九日　二八二
二四　宮本小一書翰　「岩倉具視宛」　明治六年五月十九日　二八四
二五　大原重實書翰　「岩倉具視宛」　明治六年五月二十日　二八七

二六　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治六年五月　二九二
二七　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治六年六月十七日　二九六
二八　寺島宗則書翰　「岩倉具視宛」　明治六年六月廿一日　二九八
二九　德大寺實則書翰　「岩倉具視宛」　明治六年六月廿四日　二九九
三〇　佐藤進書翰　「岩倉具視宛」　明治六年六月廿四日　三〇一
三一　青木周藏書翰　「岩倉具視宛」　明治六年六月廿六日　三〇五
三二　青木周藏書翰　「岩倉具視宛」　明治六年六月廿六日　三〇六
三三　青木周藏書翰　「岩倉具視宛」　明治六年七月十日　三〇八
三四　九鬼隆一書翰　「岩倉具視宛」　明治六年七月十日　三一一
三五　岩倉具視書翰　「三條實美宛」　明治六年八月廿七日　三一五
三六　三宮義胤書翰　「岩倉具視宛」　明治六年八月廿七日　三一六
三七　岩倉具視書翰　「鮫島尙信宛」　明治六年九月十九日　三二〇
三八　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治六年九月十九日　三二四

三九　伊藤博文書翰　「岩倉具視宛」　明治六年九月廿三日　三二五
四〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治六年九月廿六日　三二六
四一　岩倉具視書翰　「黑田清隆宛」　明治六年九月廿七日　三二六
四二　伊藤博文書翰　「岩倉具視宛」　明治六年九月廿七日　三二七
四三　黑田清隆書翰　「岩倉具視宛」　明治六年九月廿七日　三二九
四四　岩倉具視書翰　「伊藤博文宛」　明治六年九月廿九日　三二九
四五　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年九月三十日　三三〇
四六　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十月八日　三三一
四七　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十月九日　三三二
四八　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十月十日　三三三
四九　岩倉具視書翰　「伊藤博文・山口尙芳宛」　明治六年十月十日　三三四
五〇　岩倉具視書翰　「萬里小路博房・東久世通禧宛」　明治六年十月十一日　三三五
五一　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十月十一日　三三六
五二　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十月十三日　三三七
五三　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十月十三日　三三八
五四　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十月十三日　三四〇
五五　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十月十五日　三四一
五六　江藤新平書翰　「岩倉具視宛」　明治六年十月十五日　三四一
五七　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十月十六日　三四四
五八　岩倉具視書翰　「三條實美宛」　明治六年十月十七日　三四五
五九　岩倉具視書翰　「大隈重信宛」　明治六年十月十七日　三四六
六〇　岩倉具視書翰　「木戸孝允等宛」　明治六年十月十七日　三四七
六一　岩倉具視書翰　「伊藤博文・山口尙芳宛」　明治六年十月十七日　三五一
六二　岩倉具視書翰　「栗本貞次郎等宛」　明治六年十月十八日　三五二
六三　岩倉具視書翰　「木戸孝允宛」　明治六年十月二十日　三五三
六四　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十月廿二日　三五四

六五　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十月廿二日　三五五
六六　岩倉具視書翰　「伊藤博文宛」　明治六年十月廿二日　三五六
六七　名和道一書翰　「岩倉具視宛」　明治六年十月廿二日　三五七
六八　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十月廿三日　三五九
六九　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十月廿三日　三五九
七〇　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十月廿三日　三六〇
七一　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十月廿三日　三六一
七二　岩倉具視書翰　「木戸孝允・大久保利通宛」　明治六年十月廿四日　三六二
七三　岩倉具視書翰　「大隈重信宛」　明治六年十月廿四日　三六三
七四　岩倉具視書翰　「西郷隆盛等宛」　明治六年十月廿四日　三六三
七五　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十月廿六日　三六四
七六　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十月廿九日　三六五
七七　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十月三十日　三六六

七八　三條實美辭表　「岩倉具視宛」　明治六年十月　三六七

参考　三條實美書翰　「伊藤博文宛」

七九　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治六年十月　三六九
八〇　大木喬任書翰　「岩倉具視宛」　明治六年十一月一日　三七一
八一　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十一月六日　三七二
八二　德大寺實則書翰　「岩倉具視宛」　明治六年十一月八日　三七四
八三　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十一月十一日　三七五
八四　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十一月十三日　三七六
八五　岩倉具視書翰　「大久保利通外五參議宛」　明治六年十一月十六日　三七八
八六　柳原前光書翰　「岩倉具視宛」　明治六年十一月十八日　三七九
八七　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十一月廿一日　三八一
八八　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十一月廿一日　三八二
八九　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十一月廿一日　三八三

九〇　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十一月廿一日　三八五
九一　香川敬三書翰　「岩倉具視宛」　明治六年十一月廿三日　三八六
九二　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十一月廿五日　三八七
九三　内田政風書翰　井上申書　「岩倉具視宛」　明治六年十一月廿八日　三八八
九四　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十二月一日　三九三
九五　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十二月七日　三九四
九六　大久保利通書翰　「岩倉具視宛」　明治六年十二月七日　三九五
九七　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治六年十二月十二日　三九六
九八　木戸孝允書翰　「岩倉具視宛」　明治六年十二月十五日　三九七
九九　大久保利通書翰　「岩倉具視宛」　明治六年十二月十七日　三九八
一〇〇　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十二月十九日　三九九
一〇一　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十二月二十日　四〇〇
一〇二　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十二月二十日　四〇二

一〇三　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治六年十二月廿一日　四〇四
一〇四　德大寺實則書翰　「岩倉具視宛」　明治六年十二月廿一日　四〇五
一〇五　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十二月廿二日　四〇五
一〇六　德大寺實則書翰　「岩倉具視宛」　明治六年十二月廿二日　四〇六
一〇七　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十二月廿五日　四〇七
一〇八　大久保利通書翰　「岩倉具視宛」　明治六年十二月廿六日　四〇九
一〇九　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治六年十二月廿七日　四一一
一一〇　大久保利通書翰　「岩倉具視宛」　明治六年十二月廿九日　四一二
一一一　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十二月三十日　四一四
一一二　大久保利通書翰　「岩倉具視宛」　明治六年十二月三十日　四一四
一一三　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治六年十二月三十一日　四一六
一一四　大木喬任書翰　「岩倉具視宛」　明治六年十二月三十一日　四一六

明治七年

一　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年一月一日　四一九
二　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治七年一月二日　四二〇
三　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治七年一月四日　四二一
四　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治七年一月七日　四二二
五　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年一月七日　四二四
六　德大寺實則書翰　「三條實美・岩倉具視宛」　明治七年一月七日　四二五
七　三宮義胤書翰　「岩倉具視宛」　明治七年一月八日　四二六
八　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治七年一月九日　四三一
九　森有禮書翰　「岩倉具視宛」　明治七年一月十四日　四三二
一〇　正親町公董等願書　「三條實美・岩倉具視宛」　明治七年一月十八日　四三三
一一　岩倉具視書翰　「母堂知光院宛」　明治七年一月十九日　四三六
參考　喰違事件關係者口供書

一二　安場保和書翰　「岩倉具視宛」　明治七年一月二十日　四四七
一三　秋月種樹等願書　「岩倉具視宛」　明治七年一月廿四日　四七一
一四　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年一月廿四日　四七六
一五　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年一月廿五日　四七七
一六　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年一月廿五日　四七八
一七　伊達宗城書翰　「岩倉具視宛」　明治七年一月廿五日　四七八
一八　三宮義胤書翰　「岩倉具視宛」　明治七年一月廿八日　四八一
參考　三宮義胤書翰　「香川敬三・藤井九成宛」　明治七年一月廿八日
一九　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年一月三十日　四八九
二〇　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年一月三十一日　四九〇
二一　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治七年一月三十一日　四九一
二二　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年二月一日　四九二
二三　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年二月一日　四九三

二四　伊達宗城・松平慶永書翰　「岩倉具視宛」　明治七年二月一日　四九四
參考　伊達宗城書翰　「三條實美宛」　明治七年二月一日
二五　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治七年二月六日　四九四
二六　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年二月七日　四九七
二七　伊達宗城書翰　「岩倉具視宛」　明治七年二月七日　四九九
二八　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年二月八日　五〇〇
二九　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年二月九日　五〇二
參考　伊達宗城書翰　「三條實美宛」　明治七年二月十四日
三〇　琉球藩尙泰請書　「岩倉具視宛」　明治七年二月十四日　五〇四
三一　三宮義胤書翰　「岩倉具視宛」　明治七年二月十七日　五〇五
三二　三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治七年二月十七日　五〇八
三三　土方久元書翰　「岩倉具視宛」　明治七年二月廿五日　五〇八
三四　木戸孝允書翰　「岩倉具視宛」　明治七年二月廿六日　五〇九

三五　岩倉具視書翰　「大久保利通宛」　明治七年二月廿八日　五一〇

岩倉具視關係文書　第五

明治四年

三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治四年正月十一日

餘寒難去候處　聖上中宮益御機嫌能被爲渡候段御同前恭悅之至奉存候貴君にも御安寧御旅行舊臘廿一日鹿兒島より御狀拜見致安悅候御用筋御都合御見込之趣被示聞拜承國家之爲恐悅存候扨去る八日夜廣澤參議邸へ刺客忍込參議を暗殺に及ひ遁逃一向何等之形迹も無之實以恐入驚愕仕候事に候尤連輔方百方相盡し置申候右に付ゐは一同甚以心痛仕居候御用濟之上は速に御東歸と存候へとも何分右等異變相生殆心配罷在候一刻も早く御歸東之樣有之度存候日田信州陸羽邊も土民動搖も有之陰に煽動致し候者も可有之當地人心自ら不穩甚以致心痛候に付ゐは吳々も神速御歸東奉

待候大久保木戸兩參議にも早々東歸之義申達置候へとも御便宜も候はゝ
此段御通被下度候何も匆々頓首
正月十一日十字過　實美
尙々御旅中朝夕御用心早々御歸東拜面萬々可申陳候也

岩倉大納言殿　至急御親披

二　岩倉具視書翰「三條實美等宛」明治四年正月十四日

新年之嘉祥萬里同風先以東西京益御靜謐恭悅各位にも彌御安全御超歳欣
然小生始一同無異越年乍憚御放念可給候抑今般不容易　叡慮を以不肖下
官へ重任被仰付實に餘身痛心能在候處別紙一帖公私混雜にて申上候段御斷申入候日次之通
り兩藩へ勅使勤仕候處兩老卿父子西鄕桂高杉杉正權大少參事始め政廳よ
り兵局末々に至り一同　宸意之趣謹ゐ拜伏感戴不一方相見請申候殊に大
參事以下奉從賛補盡力此上は一藩を抛ち勉勵重恩に奉報答との定論にゐ
其情實詳悉承屆候事に候前條に付ては敢て片言虛飾申上候儀に決ゐ無之
所謂奇妙と存候程之儀にて偏に
皇威之令然所以を以て御誠意之處到底通徹仕り實に兩藩上下共に一點間
然する所なく御一新之儀も彌以て御成功無疑ものと爲
朝廷爲天下如何計か奉恐賀候於不肖小臣も聊奉命之任相遂候譯にゐ大慶
不過之何も御安心願候乍併右に至り候も全く兩參議山縣河村西鄕杉等出
格盡力之所致に候間此段は兼ゐ御注意願入候尙不日歸東可及復命候得共
荒增形行不取敢言上候間宜敷御取捨にゐ先以て被安　叡慮候樣御執奏願
存候仍言上如此候也
正月十四日　山口表より　具視

右大臣殿

大納言殿

參議中別段書狀不差出宜敷御傳聲願存候事

尙亦申入候

一兩藩談合決極著目ニ所追々承候所畢竟復古ニ基本を被開候は全く薩長土三藩合力同心補助し奉り候ゐ今日に至り候事に候へは第一三藩益同心戮力相合し其力を一混にして　朝廷に奉獻十分ニ御權力相備り候樣無之ゐは今日迄ニ處　朝廷空權を御握り相成候同樣にゐ何事も不行は必然如何なる人傑輩出候と雖も萬々六ケ敷云々底意と被存候就ゐは三藩合一と申所眼目との次第より西鄕大參事杉權大參事高知藩へ跋涉厚く賴談致し度趣申出其旨趣神妙と存候に付乍卒爾獨斷及許容候隨ゐ大久保木戸兩人も見込ニ趣有之候由故僭越ニ罪何共恐入存候得共一分を以て同行可致旨相達同藩へ差越候左御承知願入候

一毛利從二位島津從三位事不容易勅命不待駕して單身闕下に拜趨可奉謝恩命ニ處病氣不得止暫時御猶豫願出候勿論從三位所勞眞に難默止は顯然見請候次第於小臣命を恥かしむるニ罪頗る當惑令恐怖候得共現事如何にも無理ならぬ容體無致方其情を汲み是亦專決心恐入候得共歸京ニ上御嚴譴を奉待候心得にて所置仕候間宜敷御聞可給候

一別紙本月十二日中日次後土州行ニ示談跡相決し明十五日小生河村西鄕等三田尻表本船より出帆神戸著港待合同十六日大久保木戸西鄕杉等三田尻別船にて出帆土州行凡七八日にゐ神戸へ歸港夫より同船の筥山縣には跡より出帆二十二三日比迄に必神戸迄著港同斷右ニ通約定仕候間遲くて當月二十八九日飛脚便船にて一同歸東復命ニ事と存候

一十二月十二日出御三名御狀正月五日著令拜見候何も令承知候英人闇殺暴人分明何より以て恐悅安心仕候薩人迚も決ゐ御用捨可有筋にも無之候得は實に

皇國ゟ御大事に付斷然嚴重御處置外國人も感戴候樣御嚴令願度存候事に候

一種々申上度候得共相應多事亦重大事なまし爲書取候ゑも行違出來候ゑも無詮次第尤筆紙ゟ盡す所に無之に付大綱の所丈一點無相違所言上候吳々御安心にて宜敷候實爲天下大賀し奉候以上

兩藩兩卿尤少々延引は候得共暖氣に至り候得は必々出府ゟ事に候也

三　岩倉具視書翰「三條實美宛」　明治四年正月廿三日

正月十一日御書同十八日於西京令拜見候東西御所々々益以御機嫌能被爲渡御同前恐悦奉存候各位にも御安全御勤務珍重候然は兩藩勅使ゟ儀萬端都合能く相勤實に恐悦於一分も聊奉命ゟ廉相立畏存候事に候則本月十四日附にゑ山口表より巨細申入候通にゑ定ゑ御披見何も御承知被下候事と存候扨去る八日夜廣澤參議邸刺客忍込暗殺に及ひ候旨實に以て何共無申條珍事大變愕然不堪悲憤事に候其後承候へは廣田彦丸とか申者の仕業にゑ同人去る十五日召捕に相成候由先々聊御安心と存候右に付片時も早く歸東ゟ旨承候先便申入候通兩參議兩大參事各共に廿二三日比上坂廿九日飛脚船にて渡航ゟ旨申上置候處甚自由何共恐入存候得共其後兎角頭痛强く困り候に付俄に陸行治定廿五日發途二月三日歸東ゟ心得に候外一同は二月一日横濱著二日歸東と存候一日後れ位と心得乍延引右に相決し申候此段早々言上如此候也

正月廿三日

一十二月廿一日出書狀御落手ゟ旨令安心候

一正月十四日書狀定ゑ當月廿一二日比御入手と存候右に何も申入候事に候

一信陸土民動搖ゟ由何かと御配慮と千萬御察し申入候

一京攝共取締り向無如才行屆居候樣存候
一小生へ守衛兵隊御差添畏存候
右早々以上

具視

三條殿

四　岩倉具視書翰「三條實美宛」明治四年正月廿四日

昨廿三日三日切にゐ何も申入候通に付別段不申入候別紙大久保書狀得と御一覽にゐよろし御取計願存候一日も早々御施行願上候早々以上

正月廿四日

具視

三條殿

平安極秘

五　岩倉具視書翰「大久保利通宛」明治四年正月廿四日

廿三日御書今廿四日鎌田ゟ正に令入落候先御安全御上坂欣然土州事も來示にゐ始ゐ安心實に御盡力之所致と千萬恭悅殊に板垣も出坂之由吳々上々都合爲天下奉賀候

一昨日川村ゟ書狀何も申入候通りにゐ甚乍自由病氣不得止陸行仕候乍去二月三日には歸東之心得に候（各は二日と存候）

一容堂云々至極尤の御心附早々三日切にゐ條公ゟ申入候事に候今少し早く候へはと殘心に存候事に御座候

一廣澤之事御同然實に切齒に不堪事に候右に付何れうんと云々寔御尤歸東之上は御互に出格盡力致度事に候

一京都改革も萬事都合よく相運ひ申候

右早々如此候也

正月廿四日

大久保殿

具視

六　岩倉具視書翰「三條實美等宛」　明治四年正月廿七日

正月廿三日十字御認三日限り御書昨廿六日十字水口驛に於て正に落手令拜見候

聖上益御機嫌能被爲渡恭悅奉存候然は廣澤異變より人心も動搖し世上何と無く穩ならぬ勢御一同御配慮之趣千萬令遠察候且造幣寮云々に付來る二月六日七日頃より三職之内一兩人御下坂之旨旁以小生片時も速に可令歸東之段每々御命拜承仕候素より當月中歸東心得候處兵隊被附下西京に於ても是非可召連との評議に付行軍規則も有之彼是示談にゐ漸く道中十日間卽二月四日歸東之筈に決し一昨廿五日令發途候事に候得共來命之通是非二日三日之中歸著可仕事に候へは早追にて速に復命可致候間此書狀到著次第御報給候はゝ道中之儀直に可相達と存候扨愚意少々有之左に申上候

一今度兩藩父子兩藩廳一統及土薩同樣合議一途に出候事にゐ則大久保木戸山縣河村西鄕兄弟杉板垣等各　叡旨を奉し一際憤發同行東上

皇國千古不拔之御基礎を立て奉らんとす天下之大幸何事か之に如かん

尤

皇運之所令然候得共御一新之大業益御成功不可疑者と奉存候其故は凡そ物には數あり三と言ひ七と算す所謂生死吉凶皆然り漢洋醫の病を診するも亦同し病勢增減等の期も亦此數に依る鎌倉は三代にして亡ひ北條足利德川は三代にして成る又元弘之御事業は三年にして敗れり然るに今度之御事業は丁卯冬より昨庚午冬に至り凡三年此の如く三藩同心戮力輔翼し奉るとの義實に成功不可疑と存候然るに廣澤之異變何たる

事にや遺憾とも悲憤とも不知所言日夜切齒のみ大不幸は申迄も無之候得共不幸之幸は廣澤の一死百千の憤怒なから箇樣の狼籍を働くの徒は幾萬ありと雖も今度こそは根を斷ち葉を芟るに至るへし在坂の參議大久保より來狀中にも今度は「うんと」やり付け靈魂を慰せすんは止ますと實に左もあるへき事に候然れは御互に殊更盡力

皇威擴張を謀るは勿論にして此機會を失はす武王一たひ怒て云々の心得肝要萬無御如才とは存候得共吳々御互は百方心力を可盡の事と存候

一造幣寮之事にて二月六日頃より三職中御兩人御下坂之事定而不得止事と存候得共兩參議も三國奔走西鄕も邂逅出府大に廟謨を輔け奉らんとするの秋出府する否三職中御兩人も派出と申事近頃如何やと掛念の儘申入候御勘考希候

一愚息へ小生護衞其外御注意之儀御傳言御懇情不淺畏存候御一同兵隊見へ隱れに被召連候との事近頃殘念之事かと存候兵部省へ御沙汰にて古制の如く隨身兵仗を賜ふの例に依り其職に應し何人つゝ被附と定められては如何哉御賢考候

右言上候尤萬拜顏ならては難行屆候得共心付之儘御三卿迄申入候何も丙丁に被付度早々如此候也

正月廿七日夜　　具視

三條公
德大寺卿
正親町三條卿

七　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治四年二月三日

彌御安全珍重存候本月朔日には御一同横濱御著港之事と令賀候天氣は快晴にゟ候得共晦日午後隨分風立候樣相覺え如何と御察し申居候事に候扨

小生歸京只樣延引何共意外ニ次第今更御斷申樣も無之恐怖此事に存候條公より御咄しも可有之候得共萬々歸京面上御斷可申入候夫迄ニ處西郷氏始ゟ能々御傳へ置可給候何分兵隊隨行足附人足等にゟ存外ニ事共に隙取實に不得止義に候將休日には候得共六日十字比歸京と存候間先直に復命於

禁中條公兩大納言面會一通り可申承存候附ゟは足下にも早速御面會申度六日夕方か七日朝か乍御苦勞來臨被下度尚歸宅即時御樣子可伺候得とも御心得迄一筆申入度候早々以上

二月三日　　三島驛にて　　具　視

大久保殿

且申候延著ニ事は吳々心外至極ニ事にゟ實に無申譯事に候以上

八　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治四年二月七日

先時は御面働候扨御談ニ末條公懇談左に決し申候

○明八日早朝條公西郷板垣等亭ゟ被行向候事

○同日夕四字兩三木大參事三人小生等條公亭ゟ參集ニ事

○木戸是非々々出席ニ樣小子明朝行向候筈に約定候事

○今日條公木戸出會何も替り候事無之候

○長州申立一紙則御廻し申入候是は不被及御沙汰旨御附紙ニ事に治定候事

○廣澤事件云々御心添ニ通り談し申候

○明後九日朝副島大隈佐々木兩大納言等參朝三藩始末申談し候約定候

○同日違論も無之候はゝ十日には兵隊御取切云々伺定め御決定ニ事に決し申候

○今日條公示談ニ所にゟは斷然御植切に相成四五萬石御費しにゟも何そ

惜に足んとの事に候大隈も明夕横スカゟ歸り候との事に候

右荒々申入候早々以上

七日

大久保利通殿　　具視

不及御答

九　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治四年二月八日

彌御安全奉賀候然は今夕四字光臨奉待候尚熟考仕候處兵隊獻物に付食祿等惣て〻規則精密〻處御評議も可有之候得共大久保へは細精〻處彼藩見込篤と御聞取可然存候將亦右一條も遷延候へは辨官邊ゟも得失種々議論も可相立と存候間斷然決定〻上は寸刻も早く歸西相運候方可然と存候間内々愚存申上置候何れ今夕得拜眉御談可申候願はくは貴卿少々御早めに來駕給候はゝ猶更都合宜候匆々謹白

二月八日　　實美

岩倉殿

一〇　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治四年二月八日

御安全奉賀候過刻は御苦勞に奉存候扨山口藩申立〻一件實に御大事と存候得は一日二日と遷延相成候ゟは益六ケ敷事に相考候明早朝八字御參掛御同伴木戸方御扛駕相成候ゟは如何此事程能不被行時は三藩〻協和も水泡瓦解〻兆と深心痛候間早々御談申候德大寺佐々木等も横濱より今晩歟明朝歸府〻筈に付必らす遲參可相成と存候間御參　廷〻處は少々遲刻に相成候とも宜候間早く長州〻一事を片附候方可然と愚考候に付前段御打合申候乍御面倒御示敎奉願上候匆々敬白

二月八日

過刻御約之ヶ條書御出來に候はゝ御廻し奉願候

一一　木戸孝允書翰「岩倉具視宛」　明治四年二月十日

捧呈亂毫奉恐入候偏御推覽奉願候再拜

謹啓先以

御清雅被爲居恭賀至極に奉存候さて此般三藩之一條成否之工合實に前途之興廢に關係仕候間事實々著に御運相立迅速其功驗相顯候邊只管奉祈念候於薩藩は一入奮勵誠に感佩之至に御座候西郷氏等之遠謨大度今日國家之大幸無此上事と雀躍之至に奉存候然るに九等淺慮不悟其深旨曾て薩藩と有同難約有共前途約依て只々御一新之際同志相誓御親誓之叡旨を奉戴し一貫可相盡と不顧微力奔走仕候然處前年長州内外數度之大難あり然るに又去年藩内之一大難を生す皆聊報國之一微志を欲達所施不得宜前後人類を盡す實不少是總て人之罪にあらさる也去月廿五日之夕西郷氏說あり天下諸藩之人材を拔今日之政府を援く難にあらさるなりと去八日右府公之邸におゐて又此說を聞或又責不審之藩之說あり然して九同憂之士空斃死するもの數人又去年之難之如きに至ては脫徒近隣を煽動し人民之方向を亂り其黨を嘯集す依て屢其情を歎訴する數回其意未貫却て近隣之嘲笑を招く又　朝威を汚すの罪不小于時今日西郷氏等之說を聞不知時機を慨歎し一跌再跌國事を誤る之罪を恐る若待今日西郷氏等之驥尾に隨ひ犬驁之力を盡す得は何そ如此之患害をのこさむと百慽難禁悲切之餘不覺過日右府公御前におゐても痴情縷々吐露而して忽慙悔愧悟再薩人に不忍對面付て は何卒將來之處薩之關係は總て山縣狂介へ相托し置可申と奉存候間仰願わくは山口藩歎願御許容被仰付度奉百願候左候へは彼一段落御目的大略相窺候上天下惣物之標準と相成爲　朝廷爲舊藩爲亡友聊盡力仕度と奉存候偏に　御憐察を玉はり御聞濟之程懇願之至に奉存候誠

恐々々頓首九拜

二月十日夜

再白ゟ先年來屢不快日々參
朝も不得仕候依ゟ退職奉願居候處昨年强ゟ
御沙汰之趣も有之且廣澤故參議ゟ
右府公被仰聞候旨も奉窺暫參仕候處最早窺置候通御沙汰を奉願候敬白

木戸孝允

岩倉公閣下

奉復

一二　井上馨書翰「岩倉具視宛」　明治四年二月十二日

謹啓早速木戸ゟ參り御意筋且深御痛心之邊申聞せ候處全く以同人も不平を鳴し臺下ゟ迫り候次第にも無之只々前途目的を懸念ゟ相起り實に右大臣公を始諸官員眞に盡力致さねはならぬことゝ是迄幾度も有之候得共頭大尾小に果行候事多く此度之事再ひ右樣相成候得は再不可救之勢に立至り却て國命を縮る樣相成候ゟは千歳之遺憾至重之邦家勢山に至り不申樣之次第のみ就ゟは勿論兩三日中には出勤も可仕樣相成可申候併相成事に候はゝ御誠心を以只々衆寡强弱に從ひ至當之理も變する樣之事無之天道之公理に基き斃而已の協心同力之御目的專要と同人も申事に御座候又西鄕抔も自分之勝手に引付ぬ樣兼々御用心十分至當之理を以ては敢ゟ御押付有之候樣有之度奉存候早速登殿復命之賦に候得共獻兵一條に付□國大參事抔に相談之一事も御座候今日拜趨不得仕併御懸念に被爲在候事故一應大意申上置候何れ都合に依り明朝拜鳳委曲可奉陳述候草々

敬白

井上聞多

二月十二日

亞相公閣下

内御直披

御覽後御火中奉祈候

一三　岩倉具視書翰案　明治四年二月十五日

追々春暖候先以御清榮欣然候寔に先達ては爲　勅使下向之處御老卿及知事殿速　叡旨御奉命有之本月六日歸東役命萬端奏聞に及候處叡感不淺實に畏存候事に候殊に西郷氏にも同斷出府段々言上之趣も在之夫々御採用廟議は勿論三藩之所も彌同心合力今度は眞に　皇國御基礎相立候事と　御滿足此事に御座候條公始も不斜喜悅爲天下奉賀候小生一分上に於ても奉命之廉相立近頃面目を施候次第いか計か忝存候是皆西郷氏足下等所致盡力と窃に令感銘候此上は只々御老卿御出府成否而已只管配意在之候樣御賴申候委細は西郷氏ゟ御聞取可給候不取敢御挨拶迄一筆如此候匆々

二月十五日　具視

一四　岩倉具視書翰「黑田清綱宛」　明治四年二月十七日

彌御清榮令賀候過日は早速御尋忝存候其後連日繁多意外無音候今夕御用閑候はゝ一寸來臨賴存候寔に舊冬は御懇談其末萬御都合小生渡航所詮も有之候事全く御苦慮御盡力之致す所と深々忝存候是非一應面上萬端可申承と存候早々以上

二　十七

彈正少弼黑田殿　具視

一五　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治四年二月十八日

來書一件早々條公へ御廻し申候御賢考の旨一應御尤に存候得共今日御治定明日夫々召出しにも相成候處頗る殘念にも存候苦勞條公迄御出向御評決次第せめては召の輩參朝無之先々御止め可然存候辨官も一人御同行直に御評議次第御取計申入候仍早々如此候也

二月十八日　　具視

追て小生は明日早々より兩兒洋行事件に付無據用事有之旁よろしく御取計賴入候也

佐々木殿

請

一六　中御門經之書翰「岩倉具視宛」　明治四年二月十九日

岩倉大納言殿　　平安　極秘啓　　經之

兎角不揃時令候處

聖上益御機嫌克被爲渡恐悦至極奉存候次尊卿にも御清榮御奉職之義と恐悦存候誠に先達御登京之節は種々申伺御世話に相成且毎々拜領物等深々畏入存候本月七日には無御滯御歸著之旨傳聞恐悦存候右府にも下坂之旨一寸上京相成候旨にゐ行向候處出立後にゐ不得面會殘心存候扨京都先々無事恐悦存候併府中御取沙汰は益不宜兼ゐ申上候通り早々御取替無之候ゐは人心安堵不仕と苦心此事に候且又華族觸頭近衞事表面は大に御一新之樣に相見へ候得共裏心は舊弊更不脫久我長谷にも大に困之由内々噂有之候只今之姿にゐは迚も華族取締難行屆哉と存候過日來長谷へも段々申入置候得共例之因循一向埒明不申困入候事に候得共先日も申上候通りの御沙汰書に候間公然難申出内々忠告之譯にゐ一向不被行困入候事に候御

承知之通御互に段々苦心漸御一新に相成其後永々蒙權職居候事故善惡共
爲國家心附候義は盡力仕度心底に候得共御沙汰書頂戴不仕候ゟは其事も
不相成傍觀仕不心成事に候何卒宜願入度候本座之義も過日段々御噂有之
其義被行候はゝ重疊と存候既に過日觸頭下に六番長を被置候ゟ小生五番
長之旨被申渡大に不都合之事に候得共一昨年惣ゟ位次之旨御布告に相成
居候事故難申出次第幸五辻上京に付相談長之義は斷然止に相成候得共右
樣不都合も有之只今之處にゟは實に方向不相立身分にゟ困入候事に候何
も可然御勘辨奉仰候六番隊之義は猶五辻ゟ御聞取可給候宮内省も小事に
は候得共不都合不少候得共是も内々阿野へ申入候迄にゟ墓々敷難參候何
分宜御賢考願入度候過日御歸著後早速御便も可申入之處彼是仕大に御不
音恐入候恭明宮女房引移去十二日にゟ悉相濟候猶追々規則等も差支無之
樣可示談と存候一寸此段申上置候今度五辻歸京に付呈一楮定ゟ追々御政
令向嚴然被爲立候事と大悅之至に候何卒々々早々斷然萬世不拔之御政令
被爲立候樣奉祈候先は右等申入度早々如此候也

二月十九日

追ゟ追々薄暑に可相向御自愛御專務奉仰候自妻も宜々申上度申出候且
又女義被召先々内々御治定被　仰出候旨坊城ゟ被申越畏入存候猶又此
上宜々願入置候何も宜願上候也

一七　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治四年二月廿七日

要用略文高免

昨日御談申候四藩内密建言巡察使ゟ伺候草莽浮浪氣脉相通候官員御處分
之義已に巡察使出張追々其運を附候處根本に御手不着候ゟは御信義も不
相立大に禍害を釀候事に相成候ゟは實に痛心之事に候間巡察使へも斷然
御手を被爲付候御約束も有之候上は至急御處分無之ゟは如何と存候事
一異宗徒之義改心之者長崎に復歸之義已に御評議も有之候處何分渡邊大

忠折合不申因循其儘相成候得共又々外國ゟ彌逼候ゑ御處分に相成候ゑは御失體とも存候乍併此一件は天下之慷慨家にも大に注目仕居候義に付渡邊大忠も能々談論を盡し其上之御處斷に不相成ては他日之心配筋とも存候間尊慮も可被爲有候得共是非復歸之義ならは御同席にて一日渡邊大忠を相招說得仕候樣有之度存候右も申入度如此候昨來所勞頗氣分あしく大亂書略札失敬御海容奉仰候

二月廿七日

一八　岩倉具視書翰「島津久光宛」明治四年二月

追々春暖

聖上益御機嫌能被爲涉御同慶此事に存候尊卿にも彌御安全欣然候誠に先達ては爲　勅使下向之處　叡旨御體認速に御奉命在之本月六日歸京萬端及　奏聞候處乍恐　至尊不一方御滿足被爲在候て此上は一日も早く御出府御輔翼在之候樣只管御待被遊候尤臣子之分駕を不待して行云々御配慮之趣は勿論眞に御病にて不得止次第等懇々及言上凡て被　聞食候得共何分にも遠く　勅使被差向候程之儀に付素ゟ等閑に被爲止候御事にも無之殊に方今之處　皇國之基礎大に可相立機會に被　思召吳々迅速御上京之段可申入旨に候條公始近頃之喜悅爲天下被賀候事に候小子にも邂逅奉傳宣之廉相立一分上に於ゑも實に面目を施候儀深忝存候唯遺憾は御遲速而已候得共追々御加養も有之候事と存候條御勉勵御約通り來月中には必御出府候樣令懇禱候乍去小生にて現場御病氣御容體承知仕候事萬々一御十分にも無之候は暫時にても一應御出府在之度候然して風土之違ひ攝養御不工合之事にて御在府難被成候儀候はゝ其砌は如何樣とも盡力可致候間其邊は御懸念無之樣存候先は一筆如此候

未二月

一九　小河一敏書翰「岩倉具視宛」　明治四年三月七日

亞相岩倉卿御親展

小河一敏

上

先日拜謁之砌御尋之義突然御請も申上かね候旁退て得と熟慮仕候に今日國内人心之居り合不申愚考之三件左に申上候

先年之鎖港攘夷之論を以主張候ものはとるに足らぬ事と奉存候百千人中に其人有といへ共雷同仕もの數多は有之間敷候又西洋之事業御開を厭ひ候もの可有之是は毎々申上候通被爲開候は夫々の機會有之義と奉存候期運に先たちて被爲開候へは腫物のうみの廻らぬに針をたてゝ痛を發候類にて手をとり仕候只其可被爲開汐合大切と奉存候併夫も少々早過候位の事は強て大害は有之間敷哉に候得共どこがどこ迄も國の大害にして有志之者の心にかゝり候は耶蘇に御座候此義は斷然不被爲開と御確定には候へ共重立候當路之人とても右府公と亞相公方之思召之如く凜確とは有之間敷候可然官員之中にも耶蘇も強て拒絶には及はぬものと心底におもひなから國禁の御さたを守り口外せぬ迄のものは數多可有之候外國よりは是非開かんとする事至緊至切に相違無御座候夫が爲そろ〳〵と人心を移し候手段は我々の目にもふれ候程の事に有之候へ共其根底を御掃攘可被遊御英斷少も見えさせられす是有志の人心の國をおもふあまりに異論を生候に至候根基と奉存候中沼の申如く耶蘇と洋學と眞同物とは難申可有御座候へ共洋學を嗜み候ものゝ内心は耶蘇を惡む心は必薄く御座候は萬々相違無御座候此故に只此處に付ての人心安堵に至處御良策御大切と奉存候耶蘇國禁之事に付外國人へ之談判之愚考は渡部大忠へ申述置候夫は外へ向ての事に候國内之御所置良御所分を被爲得邪教浸入之患を全く被爲防候義有志の人心を被安候のみならす御國體御維持之緊要と奉存候此御見込委細奉伺候上尚申上度愚考も御座候是は中々不容易事と奉存候第二は昔日勤王に心を盡候て今日御賞參にも御採用にも不相成もの御座候

て却て昔日は佐幕など申唱居なから才子は今日も廟堂上に御用ひのもの不少もとゟ勤王之義士は自己之榮の爲に志したる事には無之榮顯を求めは仕間敷候へ共其徒類のものゝ中には不快を懷候もの數多可有之夫か爲に　朝政をさみし候樣之心底のもの有之自ら不平を釀候と奉存候もと勤王之者は駕馭して一彈丸と被成候こそ大御所置に御座候いかにも此處に御眼闇き樣奉存候聊の御賞典を被爲惜其爲不平を生候て御手數を掛候義不少樣成行候ては御不束之事に御座候尤其毒あれは其病はおもひよらぬ處に發し候ものに御座候第三は從來申上候民藏之體末其宜を不被爲得と奉存候此義之委細は昨年迄に重々申上候事故今更不申上候此三ヶ條に良御處置を被爲得候はゝ自ら人心和平可仕と奉存候猶申上候は過日も御意御座候今の人心は狡黠にして堯舜の世の政にては治らすとの御一語何分にも丞相亞相たる御方之御心とは不奉存候是は御事蹟上にては不申上只御心念上を乍恐奉責候孟子の所謂難きを君に責る是を恭といふとの語をふまへ不敬にわたり候詞は御堪忍奉願候誠恐誠懼頓首謹言

三月七日　一　敏

尙々今度之三藩ゟ御親兵さし出候義に付ては何分後年の成行不安心に御座候爰にては薩長土之練强之精兵に可有之候得共其子はまだ〳〵よしと見ても其孫に至候ては必柔弱のものに可相成其位なれは外に御良所置も有之へくかとおもはれ何分不安心に奉存候西鄕殿始其位之處に目のあかぬ事は有御座間敷のみならす廟堂上にては後年の利害も御見拔之事には可被爲在候へ共何分不安心に奉存候只後年弱兵に成候のみならす御處置によりては數十年を不待して弊害生し可申是は固陋の偏見か明諭を奉仰候謹言

○御都合次第は丞相公へは被入御廻覽被下不苦奉存候敬白

○

此餘にも奉入尊　聽度件々御座候過日も申上候通何分にも香川一同一夕之拜謁相叶候はゝ其砌何も可申上候猶又弊邸ゟ被爲遊光駕被下置候義何分宜御繰合御沙汰奉願候謹言

二〇　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治四年三月十日

玉章一見今日彈臺始末御引取早々態々御懇書深忝存候元來小生行懸り之事故如何と懸念候處先々都合宜敷段安心此事候

熊藩云々橋爪云々御配慮此上御盡力可給候かねて申入置候オタギ家來疋多之口書又今日承り候件々有之實に油斷不相成事に候併決極大事は不可成只々闇殺之憂而已是迚も一身心得さへ候へは決しゑ數十人同心切込抔之勢は無之かと存候次第之由に候

奥羽之方ゟも幸之事有之探索申聞候事に候

右早々如此候也

三月十日

大久保殿

具視

請

二一　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治四年三月十日

只今安場一平ゟ申入候通り今日參會相濟次第かねゑ之人家來迄申來候處彌隱謀明白と存候付ゑは府にも無助才存候得共不都合出來候ゑも如何一應御心添御打合被下度存候定ゑ年之助ゟ巨細通し申候事と存候萬々一府ゟ不通樣之事に候得は年之助も可疑ものかと存候仍早々如此候也

三　十日

大久保殿

具視

尙々着手之事は明日と存候間北島山形等は今晩にも更に御打合有之度候山形之處は明朝にゐもよろしくと存候草々以上

二二　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治四年三月十三日

御念書忝存候御蔭にゐ安心且昨夜深更北島よりも來書着手之事今日云々申越候

一安場差出候後早速府廳ゐ御出席之旨扨々御苦勞併萬都合と忝存候御示之條々何も合承知候

一激徒は御捕ひ相成候とも若し愛宕之處手延抔に相成萬一脫走等候ゐは一段面働候間此處宜敷御配慮被下度候亦同人嚴に押捕或繩附抔事有之候ゐは一方より何とか大に論說可起候間昨日北島申候通り順序相立候樣有之度候

一かねゐ藩々動止云々の事實に大切と存候間府刑打合十分に探り得候樣亦飛脚云々等是又御盡力被下度候

一着手之上は四方出入口能く手の届き候樣有之度候必散亂候者も可有之哉と存候

今朝も府ゐ御苦勞之旨に付申も愚之事に候得共御請旁一筆申入候何卒書類手に入度ものと頻りに存候事也早々以上

三月十三日　具視

參議大久保殿

二三　德大寺實則書翰「岩倉具視宛」　明治四年三月廿三日

今日は御不參御所勞御保擁專要奉存候今朝はサトフ御談判御苦勞に奉存候御都合振委細外務卿より承り候先日來屢御奔走先肥後伏罪に相成御互に安心此事に候

一別冊三綴京都府ゟ今朝到來入高覽候
京師米藩邸之處は兼ゐ取締被仰付候前橋龜井等ゟ御内沙汰にて取締被
仰付其旨府に於ゐも可相心得辨官ゟ申遣候都合に御座候
一昨日薩に御預人總ゐ都合宜相運ひ候爲御安心一筆令拜啓候
右急々言上如之候也

三　廿三

實則

巖倉公

二四　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治四年三月廿六日

御安全欣然抑今日鳥渡出頭心得之處無據來人有之一書を以申入候
一岩下事明朝申談し候心得に候但し西四辻其儘にゐ權知事被　仰付可然
哉明日可及御評議候得共御勘考置可給候

一先日京都府藤村ゟ片岡ゟ之文中に奈良縣云々の評あり亦先日井田大田
黒等申立官員中云々の内に海江田の名あり必行違之事と存候得共同人
ゟ何とか御往反有之候はゝ如何と存候亦當節一應出府に相成候はゝ萬
事御趣意も相分り可然存候尚御賢考可給候
一召兵隊已に一大隊は着今度の處は例とも違ひ着早々急渡御取扱無之ゐ
は不相濟と存候得とも拵候上にゐも可然哉何分にも手拔り候事出來候
ゐは不相濟是も御賢考置可給候
一黒田大參事今日も入來にゐ段々苦情有之候是も明日は御談し申入何と
か御取極め有之度存候
尚々色々御談し申度事有之候へとも尚後日を期し候早々以上

三　廿六

尚々長土出兵一向音なし如何哉と存居候政體之處も早く御取極め各出
府直に御下問に相成候樣御内決下拵出來御座候樣祈望候草々以上

位階云々御父子共直に御宣下可然存居候事に候何も可期面上候也

具　視

大久保殿

二五　木戸孝允書翰「岩倉具視・三條實美宛」　明治四年四月三日

尊書相達忙手拜戴謹ゐ奉誦候先以　御一新已來之御果斷御揃御清榮被爲在奉恐悦候東京近況縷々御示實に
爲　邦家難有御事に奉存候所詮曖昧姑息之御所致に相成居候ゐは益天下之人民方向に迷ひ終に確乎たる　御基礎難相立と奉存候たとへ一時は暴令暴行など相唱へ候とも將來御維持之目的相立候上は天下戰慄仕候位に無之ゐは決ゐ　御主意も徹底不仕御威光も相立不申終に萬民安堵之境に至り候事無覺束と奉存候尚後來之御惜□宜不申ゐは却ゐ今日之御果決後日之患害と相成り候事は必然之儀に御座候間彌無御緩弛樣奉禱候大村等之受災候も必竟始終之御所致一轍不仕より出し事にゐ　御一新已來　朝廷之不振も只此一弊にゐ御坐候間此後之所實に以御大事と奉存候間何卒今日之　御主意一貫仕候樣奉願上候島津上京に付ゐは過日も申上候通り知事引續き上京仕候心得にゐ支度罷在申候處從二位之不快にゐ御猶豫奉願候次第然處從二位病勢益增長終に去月廿八日曉泉下之人と相成一統之悲慟不大方御垂憐被玉候臨終建言之趣知事相認め呈書候間微意徹上仕候樣宜奉願上候尚近況長松少辨に申含候間乍恐御聽取奉仰候誠恐々々頓首

敬白

四月三日

孝　允拜白

三條公閣下

岩倉公閣下

二六　岩倉具視書翰「三條實美等宛」　明治四年四月六日

昨日延遼館英公使談判別紙之通小生素より不案内にゐ尤不行屆之次第恐怖此事に存候尚宜敷御賢考願候抑彼之輕侮する所眞に憎へし實に遺憾千萬不堪切齒事に候右に付ゐも只此上は海陸兵力一日ゐも一日盛に御更張之外無之と彌増渴望仕候尚明日拜上萬々可申承候仍御廻覽願候也

四月六日　　具視

三條公
德大寺殿
大久保殿
副島殿
佐々木殿

二七　岩倉具視書翰「毛利元德宛」　明治四年四月十日

御書拜見候薄暑之候愈御安全珍重存候然は先般御老父へ　勅諭之次第有之速に御受御東上可相成之處豈圖ん御所勞御臥褥に付尊君御名代として來月上旬御發程之筈に候處御老父御病態餘程御手重之趣實以恐愕此事に候早速參朝遂奏聞候處乍御遺憾親子之情不得已儀に付東上延引御懇願之儀御許容被遊候殊に自後向暑之折柄精々御看護速に御快起に相成尊君一日も早く御東上御座候樣御沙汰候小生共よりも御同樣令懇禱候萬託神代口頭候得共不取敢御見舞旁御答申入度如此候匆々以上

四月十日　　具視

毛利三位殿

尚々御容體書一紙神代より令落手候木戸之處本文之次第御同樣舊臣之情察入申候得共强ゐ出府之儀御沙汰相成候間尚尊卿よりも御促し速東

上之樣御配慮有之度賴存候也

二八　岩倉具視書翰（木戸孝允宛）　明治四年四月十日

三月廿六日御狀一通神代浪江出府面會正落手薄暑之候愈御安全御滯在珍重に候然は鹿兒島藩ゟ往復之上其藩にも二位殿爲御名代四月四日知事殿御發足御兩藩凡同時東京御上着御心得にて專御用意有之候處豈圖去月十九日ゟ從二位殿存外之御病發兎角御快方にも赴兼候而已ならす御病勢も日加御困臥之趣右に付知事殿夜白御看病にゑ御父子之御至情不得止暫御上京御猶豫御願候趣此際誠御殘念被　思食隨ゑ條公始御同列に至り實遺憾之義候得共御尤之次第致方も無之義御願之通に御聞屆相成候併御快方御目的相立候上は速御東上有之度將御取込中却ゑ御心配存候得共何分不容易御容體に付早速爲御尋
勅使侍臣堀河明後十二日出帆被
仰付候又大典醫伊東爲御診察被差下候何も神代ゟ御直御聞取被下度候
一九州邊之義に付縷々御申越何も承候巡察使幷參謀長土肥出兵各盡力大小藩共方向漸相定候樣に至何も申分無之候處如命薩一藩出兵無之或久留米ゟ歎訴使者相立候趣彼是にて巡察使始頗苦心諸藩人心も狐疑を生し候次第參謀長松等ゟ先達申越候に付早速大久保出會懇々及相談候處右樣之儀實不審存候得共自分には兼て日田出兵之始末を總て示談承居候に付今更藩論生異議候なとの義誓ゑ無之事と存候得共尙行違に相成候往復可致候併此く迄評決之義吳々御懇念之義生候事は無之と察候旨候右に付日田表ゟ御往復三紙正合落手候自餘來示之旨何も令承知候小生力之限は十分盡力仕居候間御遠察被下候
一筑前黑田御處置之儀元ゟ出兵中斷然被　仰出候筈に決し委曲井上少輔ゟ申入候事候其後佗日替り無之候得共先知事至急出府被　仰付其上御處置可然右は大に後害を遠慮候事ゟ右樣相成候

何分にも先日愚書にて申入候次第又井上ゟ同斷等にて萬御氷解被下片時も速御出府被下度左に申入候

一從二位殿意外御大患に付知事殿御上京御延引程之義貴殿にも舊臣之至情殊に多年爲　朝廷爲天下艱難を共に被成候御方之義元ゟ知事殿御同樣當然之義にゐ申入候も頗無心存候得共今度兩藩知事殿始御出府之義は御一新來之大機會一重大事に付此際貴殿には速に御出府御父子御名代御勤之御心得有之度此處は能々御聞取被下公私之別斷然御請有之度偏令懇禱候巨細

勅使ゟ御沙汰可相成亦條公ゟも委曲被申入候筈候

一兼て御うはさも有之候に付此節前原召に相成地方官被　仰付候事に御內評被　仰付候仍早々如此候也

四月十日　　具視

木戸殿

二九　岩倉具視書翰「三條實美宛」明治四年四月十一日

御所勞御全快明日は御參之旨重疊恐悅に存候扨近頃如何之願に候得共御承知之通小生實に文盲無筆兼々困苦其上書取之方は殊に不調法に付大抵之御用は愚息に代筆爲致度御宥免之樣冀上候愚息此頃從越後歸宅に付右等之事申聞度存候當人至ゐ愚直小生申上候も如何に候得共決ゐ他へ漏洩之憂は無之尤嚴重に誡め申聞候間偏に御宥免願候

御相談申上候件々

一毛利從二位薨去に付御內評之次第

一薨去に付知事へ爲御尋堀河侍從御差下之事

一知事へ爲御尋御菓子被下之事

一贈位使堀河侍從勤仕之事

一賻弔使是亦堀河侍從勤仕之事
一宣命文幷賻物之事
　但閑叟之節見合せ御取捨之事
一知事五十日之御暇之處葬式より三十日を期し別勅にて除服出仕可被
　仰付之事
一今朝御回覽之從二位遺表に付御沙汰之一紙堀河侍從へ爲御持之事
右明日拜顏御談可申候得共宍戸等御内評之義も有之且小生十一字退出相
願度に付先つ肝要之件々一筆申上置度早々如此候也
　四月十一日　　具視
　三條公

三〇　岩倉具視書翰〔三條實美宛〕　明治四年四月十一日

一明十二日八字無遲々三職一同宍戸等參仕肥後藩兩人罷出大に御内評願
度との事有之旨昨日大久保申出御治定相成候最尊家は一同參上之旨始め
御評議も候得共又世論も有之候哉に付前文之通相成候仍之何卒御參候樣
大久保申居候幸御出仕之趣大安心此段申上候尤朝來可申上之處頓と失念
延引何共申樣無御座候都合にて御早出にゐも一大事之義に付八字御參願
度候
一黑田御所置之義に付賢考之旨一同は申傳候處他日之害遠慮候得は知事
　召之義實に御尤之次第と一同同意御治定候
一先知事召着府直に免職謹慎之事
一大參事始罪科刑部調之通
一知事藩士家祿總て從前之通
一改め知事宮御方可然
一大參事大田黑可然

一巡察使福岡近傍ゟ轉陣可然

一參謀井田外に長土之内御評議

右之通凡御内評に候

一肥前徴兵九州御用にゟ歸國願度大隈より秘密懇々内願此義は明日拜上可申上尤三藩親兵出張之上の事に候

一官制之事に付段々御内談申入其筋有之候得とも何分此間以來御所勞且小生も繁多旁延引に付明日御出仕之上參謀中より御催促申上候はゝ何卒兩三日中一同ゟ可及相談御返答願度候

右明日拜上御談可申候得共宍戸御内評之義も有之且小生十一字退出に付萬一間合無之節の爲め肝要之處一筆申上置候仍早々如此候也

四月十一日　具視

三條公閣下

三一　岩倉具視書翰「嵯峨實愛宛」　明治四年四月二十日

一條約云々御承知之通之末別紙澤ゟ伺出候間御評議之上乍休日明朝にても一同參仕承候はゝ如何と存候

一支那行之義に付取調書澤寺島ゟ差出候分卽御廻申入候御一同御傳覽希候

四　二十　具視

嵯峨殿

三二　岩倉具視書翰「澤宣嘉宛」　明治四年四月二十日

然は昨日は御書中條約改定取調之儀田邊渡邊兩人出頭之義何も承候今日參仕之上治定可致候得共多分明朝一同可承哉と奉存候刻限場所等之義夕

刻迄御申入可被下候將又支那行之義過日御書取御廻に付更に大に御評議中御座候兩三日中必可及御答候仍匆々如此候也

四月二十日　　具視

澤　殿

三三　岩倉具視書翰（嵯峨實愛宛）　明治四年四月廿二日

一日田巡察使之事

一如命大久保入來何も承候然る處小生之見込とは相違にゐ四條始め巡察使はすへて御引揚之運ひに至候上は其方可然兵部省見込之由併し人心方向如何薩論云々有之候哉も難計依之四條隨從薩兵二小隊は引揚日田博多等之内ゐ其儘差置かれ可然右に付大山某之處は大久保ゟ程能可取計旨引受に候

一井田之處は情實大隈ゟ篤と申諭如舊大藏へ安ぜん勤仕いたし候樣いたし度候是は小生ゟ大隈ゐ示談可致候

一鎮臺出張官員誰々と申義明日兵部省ゟ可伺出旨に候元來巡察使一端引揚かけ候ゐ又出張と申ゐはいかにも不體裁に付斷然鎮臺に替其方可然又薩風說云々之處は則薩二小隊を殘し候へは夫れにゐ可宜敷哉之旨小生見込とは少々違ひ其後とも最早右にゐ御治定にゐも異存無之候

一兵之處は熊本佐賀一大隊つゝ鹿兒島二小隊前文の分至急差出候と之趣に候

一一昨日鹿兒島知事西鄕等も着之由元ゟ前義之通何も替り候事も無之巨細大久保より承安心候併し木戸なと今度は始末定めゐ深く疑惑を生し候哉と深く懸念候間大隈ゟ木戸ゐ篤と申通候樣いたし度候是は小生取計可申候

一巡察使一件右御治定候へは直に御申越願入度候大隈招き候ゟ井田大田黒木戸之邊夫々情實申遣し不都合無之候樣取計内談之心得に候

一官制之事

今日は是非御内談決し候心得之處意外之邪熱無據引入候多分瘧症かゟ由明日ならゟは分明仕かね候得共所詮當分出仕は難叶依之近頃御苦勞恐入存候得ともかねて願置候官員云々御持參先尊卿丈光臨願度候其節萬々可申述候

右御請旁如此候也

四月二十二日　具　視

嵯　峨　殿

三四　岩倉具視書翰「三條實美宛」　明治四年四月廿三日

先時御書拜誦今日も不參恐入候今日午後之樣子にゟ瘧否可相分若愈瘧候得は恐入候得共暫引籠候事と存候併まびには精々御用向取調愚息以代筆可申上候

一尾州獻言拜見卽令返上候阿州も同段之事にゟ右は兼ゟ言上候通先列藩獻言を以御互始於政府根本見込を建今度上京藩々ゟ御下問有之度存候右に付先日來見込書付大基礎大略方法之處極密大隈ゟ示談致候處同人にも同意段々配慮漸昨日同人持參候卽別紙御廻申入候扨これを清書之上先山縣西鄕新吾兩人ゟ懇々内談致可試と愚考候抑列藩の權力を可殺義は今日之急務上々策候得共諸藩而已力をけつり三藩は尙依然却ゟ加威力候樣之譯に立至候ゟは佗日之大害ならんか三藩無承引は不如平均力を計り漸を以可運勤歟此處實可注目之第一と存候に付前件兩人ゟ先懇談心得に候尙御賢考拜承仕申候仍之尾州之所先一と通御返事にて跡ゟと申事可宜哉と存候

四月廿三日

條　公　　具　視

三五　岩倉具視書翰「三條實美宛」　明治四年四月廿三日

此書は藩制に付諸藩之獻言又小生愚意ヶ條書にて極密大隈に談し同人漸昨日持參にゐ只一見之儘御廻申候愚存と相違之廉も有之又加入致度件々も取落有之候且此文體大藩を竊に說き同心獻言之見込に候得共小生には諸藩之獻言熟覽廟議之根本如此に付一同遂評議以漸施行可然に付先御下問候間各無忌憚精密熟議可申出と此度は御互之内ゟ歟何とか余り嚴に不成方にゐ實事之御相談に有之度存候只今之處極密御覽希入候早々御返し願度速に增減淸書可仕候嵯峨卿たけ内々一覽明日持參之樣希候賢考之趣は其節御申越希候

四月廿三日

條　公　　具　視

三六　池田慶德書翰「岩倉具視宛」　明治四年四月廿四日

肅啓仕候薄暑之候先以
尊卿愈御淸勝被成御奉職奉萬賀候抑今般御轉住被成候に付御舊邸之義御懇切に御讓渡被成候深く畏入奉存候末家池田德定にも早々相運被下於本人深畏入候義と奉存候右に付ゐは御家來衆迄家令ともゟ段々及御談候義も御座候旨に候是又御懇切に御承引相成重々以難有奉拜候今朝爲伺
天機參　朝仕候に付拜鳳眉御禮申上度存候得共御用繁にも可被爲有哉と差控先不取敢以封中申上候御家扶中にも御懇に御世話給忝乍恐御序に宜敷御致聲希存候右迄言上候書外尙拜顏可申上候兎角時令不調別ゐ御保護

所祈候恐懼頓首

四月廿四日

慶　德

岩倉大納言殿

三七　岩倉具視書翰「三條實美宛」　明治四年四月廿七日

只今御念書之趣拜承今朝來毎々御苦勞恐入候扨九州地方之義巡察使失策云々御細紙何も令拜承候既に今日御示談之通決定にゟ長松書狀出來田中ゟ巨細及返答兩人口氣にてはかく迄の御配慮薩藩苦心之上は何も異議有之間敷長松には黑田知事着之上御處分當然と申居候程之義故前議之通にては如何被思召候哉又黑田も御催促に相成候へは必來月十日十五日迄には着可有之旁小生には今朝御話之通にて相濟候はゝ重疊と存候若夫共是非來命之通と申義に候はゝ尤異存無之宜敷御評議可給候若亦小生ゟ大久保ゟ可掛合候はゝ如何樣共心配可仕候乍去同人此度は不一方苦心奔走遂に決心西下に至候運ひ可相成は申談之義御免願度候

一こゝに一事申入置度義鎭臺出張官員佐熊兩藩出兵幾日比と決定何も瞬息に無之ては失機會候間山縣ゟ厚く御示談至急運候樣希候

右御請迄如此御座候

四月廿七日

具　視

條　公

追ゟ別紙二通二見一鷗內々持參此輩御調相成候はゝ必廣澤暗殺始末手掛り出來可申極密申出候兼ゟ行掛之次第も有之候義御一覽後明朝必大久保ゟ御渡希候既に同人九州筋關係之者も可有之哉之噂に候　早々以上

三八　岩倉具視書翰「嵯峨實愛宛」　明治四年四月廿八日

先時御再答謹承
一官制一冊今日中御請書給候旨畏存候近頃誠に御苦勞存候得とも何卒明
朝御參　朝掛條公ゟ御持參過日御咄し申入候始末一應得と御談し給間敷
哉右は大久保俄に西下に付ゟは明日にも官制之處云々參議一同御噂に相
成候樣大久保ゟ内々申出候尤御人撰邊之處は早くゟ漏洩候ゟは大へんに
付私木戸一同出府之上直に御取極め願上度旨に候吳々御苦勞に存候得共
宜敷願入候也

四月廿八日　具　視

嵯　峨　殿

追ゟ明朝之處吳々も御苦勞存候得とも小生にも押ゟ參勤仕度不得已御
苦勞願入候且明日參議一同ゟ官制丈之義御談に相成候はゝ重疊と存候
次第有之候委細面上之上候得とも御兩君とも御同意に相成候へは深畏
存候也

三九　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治四年四月廿八日

不相變懇書忝存候只今來客中跡より書類得と可一見候尚條公へも可申入
候只々齋藤出會の事企望罷候扨明日より更に大久保卿長崎表へ暫時出張
被仰付候事に候定て世論も可有之御心得迄一筆申入候早々以上
四　廿八　具　視

佐　々　木　殿

四〇　藤井九成書翰「岩倉具視宛」　明治四年五月朔日

稽首拜呈仕候倍

御機嫌能被爲渡奉恐慶御直に御機嫌可奉伺之處御繁務中御表限り御不沙汰仕書中を以奉伺且言上仕候兼ゐ御配慮被爲遊候事にゐ別段言上も恐縮に御座候得共世上之風聞とは乍申木戸參議殿退進云々又は同人方之書狀到來に付大久保殿山口藩行又は板垣大參事集會にゐ兵事論云々薩論大山云々種々昨今之新聞抔と申習に相成諸省官員等も彼是ぎはく論御座候由昨日も官中にゐ史局之内評に付長松少辨殿より傳聞仕御模樣に被考旁に付何卒木戸上京之上は乍恐斷然之御所置速に被爲在度奉祈上候迄に不顧恐言上仕候少細事より萬事之議論增長仕御風習に相成煽動仕候者は右等を以て虛色仕候樣に苦心仕候間乍多罪有姿之儘御機嫌克旁奉呈愚札候恐惶頓首謹言

五月朔日

言上

藤井直幸

御側中

四一　岩倉具視書翰「新納立夫宛」　明治四年五月八日

未五月十二日中御門卿ゟ屆六月朔日　川便ゟ返事呈

三白先達ゐ浮浪徒御著手に相成候後此比に至りよはと靜謐に趣き重疊此事に存候也

東西京御靜謐恭悅此事に存候彌御堅固御奉職欣然小生にも先以ゐ無事候間乍憚御放念可給候扨今度は知事殿西郷大參事始め亦御取拔兵隊凡ゐ御沙汰之通り奉命且出府之上も萬都合よろしく爲國家令賀候然るに長州老公薨去實に遺憾此事に存候右に付凡ゐ御運ひ相後れ申候事に候其上俄に大久保西郷義山口表發向被仰付候此義に付ゐも例之惡說誤傳可有之存候得共決ゐ異儀有之程之事に無之候間御懸念無之爲め一筆申入候巨細は入込難書取候將今度兩御内儀女房凡ゐ云々御所置に付官人御減少之義宮内

省ゟ申入候旨承候右は其通り候得共彌御所置之砌は足下東上申入候か亦誰か本省より西上か兩條之内と存候兎も角懇々御談し不申入候ゟは不都合出來候事と存候尚人撰等之所も御心懸可給候仍早々如此候也

五月八日　　具視

新納權大丞殿

追ゟ近比私情申入候も如何に候得共權内舍人野口某元膳藩之者に候同人勤方如何に哉小生少々續き之者に付懸念候不都合之筋も有之候はゝ嚴敷御責問可給候又勤仕向難屆事に候はゝ決ゟ無御遠慮有樣御申越有之候樣格別任御心易打明御頼申入候足下限り必御内々に御頼申上候也

四二　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治四年五月廿九日

大久保殿　　具視

昨日は出頭御面働申入候何も相承安心凡ゟ條公兩卿ゟ申入置候事に候木戸にも今日歸京屆に付今日より三日の間御同樣被仰付候小生今夕は可致出會と存候橋爪一件別紙之通候間御心得迄に申入置候草々以上

五　廿九

四三　副島種臣書翰「三條・岩倉等宛」　明治四年六月二日

聖上益御機嫌克可被爲在各尊下益御精勤御輔相可被遊恐悦此事に御座候下官事前月廿四日出立之末海上一點不揚波同廿七日夜半函港着致し候差付魯國領事官ゟ引合候處未本國返簡參居不申餘程困窮之體にて樣々遁辭被申候出立前右領事官ゟ外務省へ申入候も今ゟ考候時は皆詐言と被存候兎に角舊幕府之時我ゟ度々不信而已打過候末に付此度に到我之信義始ゟ立申と思更へ罷在候其中本國返簡候時は直樣ポッセット港ゟ出立可申もし遲延致候時は此地に八月中位は碇泊之含御座候猶此情實報知之爲魯國ゟ

軍艦今日ハニコライスキヘ出立候都合に御座候任重責大才微力薄只々國命を辱めん事を而已恐怖罷在候今頃は大久保木戸兩參議も出京御改革之御詮議有之哉と奉存候蝦土之義天府四塞沃野千里山饒良材海富鱗族充分拮据經營之手を被爲盡候半は御國之富謂も不可なりとせさらん歟此段荒辻爲可申上如此御座候納言參議中ハも宜敷御致聲可給候誠惶誠恐頓首謹言

六月二日

遣魯國使　副　島　種　臣

三條右大臣殿

岩倉大納言殿

四四　伊達宗城書翰「岩倉具視宛」　明治四年六月八日

從天津馳一封候先以

皇室倍御機嫌能被爲揃乍憚御同意奉恭悅候隨而各位愈御安清奉職遙賀之至存候陳は本月朔日宗城等一同乘郵船二日朝揚錨發上海候處依然無風浪昨七日無異着此地申候早速李鴻章へ照會差遣明日於同人方應實時陳欽等可及面晤都合尤李全權應補翼之命は去月廿五日歟請候由候此邊暑威實に難堪九十六七度乍航海中六日抔は百十六度に至申候尤隨員等皆以壯勵候條御降念可給今日上海へ歸便之趣に付布字匆々如此御座候也

辛未六月初八

宗　城

大納言殿

四五　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治四年六月十日

先々快晴候處御清榮欣然候寔に過日は御苦勞氣之毒に存候扨其分切御賴申入候秘一件實に殘り一大患頗る苦慮罷在候次第何卒兩氏御見込條理の邊

御勘辨之處令承知度明朝にても來臨不相成哉此段御賴申入度早々如此候也

六月十日

追て連々不參何共々々恐入候得共治療とうか相應可致哉伊藤にも骨折呉候條今暫時御憐愍願上候事に候仍早々如此候也

具　視

佐々木三木殿

内々啓

四六　岩倉具視書翰「大久保利通宛」明治四年六月十五日

一昨日御細示何も承候御所勞如何に哉とうか明後日は御出勤之旨恐悦此事に存候

一御内話云々偏に御返答御待申居候右御報次第萬決し可申存候事に候昨日木戸ゟ内話一昨夕始而山縣ゟ承知之由にゟ頗る恐怖御見込通り不行口氣に候

一三造一昏木戸ゟ廻り候由御異存も無之候はゝ早々御返し可給候

一橋爪事達し相濟申候旨大木申出候

右早々如此候何れ根元云々御返事分り次第速に一應面晤申度御一筆被下候はゝ朝夕の内直に可令參上候早々以上

六　十五

具　視

大久保殿

四七　岩倉具視書翰「大久保利通宛」明治四年六月十六日

別紙之通返答候御一覽可給候明十七日七字兩大三事小生邸來臨御待申候

具　視

大久保殿

宜敷御傳可給候也

六　十六

四八　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治四年六月十九日

要用而已申入候今朝條公木戸出會よほと盡力說諭被致候旨に候得共敢ゑ承伏不仕所詮難被行見込此上申入候得は申入候程却ゑ如何と懸念の話に付明朝西鄕板垣參　朝被申入同席にゑ有樣申入尙兩三事見込承り候事に約定仕候併今日板垣昨日間違替り出會の旨に付其樣子にゑ何とか可被申越存候處今に沙汰無之に付前議之通りと存候間此段內々御心得迄一筆申入候御心附之事も候はゝ御內諭可給候早々以上

六　十九

大久保殿　　具視

尙々御見込も候はゝ御返書其儘條公に一覽候樣に御認給候はゝ重疊に存候

今日は伊藤俊介入來不計大議論に及候次第尙明日は可申入存也

四九　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治四年六月廿九日

不相替御懇答忝存候今夕五字以上御都合次第御出被下候はゝ重疊忝存候右に付何も御返事不申入候但し足下大藏御奉職之事尤恭悅天下億兆の注目する處此一省に止り候事に候よろしく御擔當斷然御着手是祈尙後刻可期拜上候早々以上

六　廿九

大久保殿　　具視

請

五〇　池田德夫願書「岩倉具視宛」　明治四年六月

臣　德　夫

誠惶頓首謹ゐ奉歎願候伏ゐ惟
御維新已還御綱紀御宏張内外ゑ萬機一時に被爲舉行終に萬國と御並立ゑ
御基業被爲立候御義誠に今古未曾有ゑ御艱難此時に當り普卒ゑ臣子日夜
奮慨其心を盡し其力を勞し職務を勉勵し乍恐寸分ゑ稗補をも不奉奏ゐは
不相濟ゑ時にゐ既に藩々ゑ内にも厚く　朝旨を奉戴し或は藩を解き或は
士民合一ゑ議を建て罷在候處舊藩ゑ如きは却ゐ不容易御厄介を奉備誠に
不忍言不堪憂次第に御座候付ゐは右に關係ゑ者追々御糺彈被爲在此上何
分ゑ御處分も可被仰付と一同恐入伏ゐ奉謹待罷在候抑此原由を推究候得
は畢竟全權たる大參事　時勢に暗く約り政務等閑ゟ終に管内幾多ゑ人民
斯ゐ御嚴禁を奉侵候者有之に至り申候右等ゑ次第は疾くにも御熟知可被
爲在と萬々恐懼罷在候　就ゐは藩情士民ゑ氣習御洞察被爲在候義にゐ敢
ゐ奉贅言候迄も無御座候得共大率士卒等は漢學ゑ弊習に泥み郡縣ゑ制度
に暗く唯從來ゑ僻論而已相唱又諸民は唯一藩あるを知ゐ乍恐　朝廷ある
を不知大義ゑ方向今以不相定中には偶有志ゑ輩有之候得共何れも多くは
散地に埋沒空く苦思罷在不堪感慨次第乍去此儘藩事も空く相成知事ゑ汚
名後世へ相遺り候ゐは實に首丘ゑ情素千載ゑ遺憾に不堪奉存候此先奈何
御處分被　仰付候共知事義先年來厚く　殿下ゑ御寵遇御懇示を奉蒙候段
平素深く銘感罷在候其區々ゑ微衷御憐察被下置乍此上御棄捐不被爲在萬
機御鞅掌ゑ御中何共奉恐入候得共
朝旨ゑ所歸將來御施行ゑ御順序懇々御敎示被下置候得は如何計り感激憤
勵可仕何卒今一度實績奉奏是迄ゑ失過萬分ゑ一も相償ひ候樣御救誘被成
下度此段　至願奉存候臣德夫此節病氣に付奉願出京仕居り候處乍恐先年
殿下ゑ御厚寵を奉蒙爾來深く奉感戴罷在候に付誠に恐多も不奉願前條有

掛り拜述泣血奉歎願候誠恐誠惶頓首頓首

辛未六月

岩倉公殿下　　池田德夫　百拜

乍恐

御電覽後御火中奉願上候　頓首

五一　岩倉具視書翰「中御門經之宛」　明治四年七月朔日

五月十九日御兩通同廿三日六月五日等御二通正令披見候當年は格別之大暑候未殘威難凌存候彌御清榮欣然候然は當地御模樣御心得之爲申入候處御念答忝存候其後三藩知事（土佐知事眞に大病）同大三事同兵隊不殘相揃追々御下問御内評之處兼ゐ思召之御旨趣貫通は無申迄三藩眞に懇和愈同心戮力最早不顧藩一途　朝廷根軸に立ち斃るゝ迄奉盡候と之事にゐ實恐悅天下之大幸何事歟如之んと在百官踊躍之事に候此頃御變革被仰出去月廿五日參議諸省卿大少輔不殘免職更に當日西鄕吉之介木戸準一郎兩人を參議に被置候廿七日ゐ追々卿輔被置各其長官に任し更に人撰等被　仰出候從來御互に配慮仕候筋も最早懸念無之相成候事と奉賀候此頃は西鄕奉職勉勵衆庶之心も大に定り且豐年之旨旁益以聖運盛張之御事と欣然仕候

一五月十八日大風嘸御困りと存候併格別御中りは無之旨珍重存候

一御家來北村源之丞義入念被　仰下忝存候

一宮内省御預　御手沙汰御用金清算帳御廻正落手恭明宮之義に付無據御出方之旨承候併これは少々過分と存候

一乍末筆當地御方新典侍殿各に至り御壯健御安心之樣と存候御下けのせつ御局ゐは槇山も罷出御目に掛り候事に御座候

右乍延引御用繁中代筆を以御答如此候也

七月朔

中御門殿

具視

御用繁代筆御高免可給候也

五二　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治四年七月二日

御清榮欣然一昨夕は緩談深々忝存候扨吉井事別紙申出候今朝も書狀遣候得共懸違候事に候寔に乍御苦勞斷然と御請申候樣御申聞之樣賴存候今日に相成宮内丈事欠候譯得と御申聞可給候今日西郷不參如何に哉同人參勤候はゝ三藩知事並尾越云々の事も可談心得之事に候亦於（今日此事木戸丈申入候處大に同意）御前御申渡し（此事も同上木戸可然申居候）云々も吉井大木横山と存居候事に候旁吉井早く決し候樣御盡力可給候大木之處明日西郷へ相談同人可然之返答候はゝ木戸の處は凡よろしかるへく條公周旋候若し御序も候はゝ何とか御勘辨賴存候只々制度之調木戸四五日にゟ出來候旨噂是丈懸念の甚敷ものに候早々以上

七　二

利通大人

具視

且申候政府上にゟは

（辨官史官主記官掌等人撰の事

（監部局式部局を置の上此人大に人撰の事

（右人撰筋に付ゟも西郷には丸々不被知人物而已か同人も彼是撰定相成候はゝ力を得候事と存候以上

五三　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治四年七月三日

今朝御答書辱存候今日は御不參之旨御所勞如何候哉尙承り度候

一吉井云々之事西郷へ得と申入候處同人　宮中にて迚も示談不十分には難調見込今夕同人招き懇諭の旨に候同人御請の上は小生も從來見込得と申入候て大に御一斷に相成度志願に候四藩も追々御前參入之事尤好機會と存候一は實に大事也

一大木の事兩三木へ得と申入候處無異儀相濟安心併跡にて木戸何か申居候得共最早御決定の心得に候

一三藩尾越云々の事明日十字御用　召被仰出候板垣杉も被　召候事尤兩三木も承知に候

一辨官云々御咄し申入候末何分今日の形行にては御憤發心も拔申候との事御尤に存候併爰極大事の所にて候間精々御盡力有之度候木戸申立章程之事尤當然候得共十分の事は數懸り可申故に小生も論し候得共四五日に出來候旨今日ゟ取懸りの旨眞に四五日に出來候はゝ重疊之事に候

今日同席は不仕候得共其樣子承り候上深く勘考

辨官　受附傳達丈

同　式部局を置く事

宮內　中務同樣の事

政府に監部を置く事

諸省　大小丞置不置の事

頭正　等を高くする事

司法臺かねて調之通

文部省同

右丈片付候はゝ人撰も出來候故急渡盡力候間今日の際一點のたゆみなく吳々御盡力有之度小生一昨日來嚴敷齒痛持病と混合三度共に飯湯計用ひ候程の事に候得共早參十二字退出願居候力の及候丈は心配仕候心得也抑御改政の始め彼ゟ引是も不參と申樣の事有之候ては實に殘心に存候任序

無益なから一筆申入候必す不及貴答候早々以上

七　三

利通大人　　具視

机下

五四　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治四年七月三日

先時は御草臥の處御苦勞樣殊に亦直に江東方へ御奔走氣の毒此事に存候扨御歸り後尙深く愚考候處寔に一大事の場合にて一歩を誤らは百歩にも至るべし足下肺肝吐露高諭之邊實に感銘就ては今日云々御内談の筋は眞に兩氏限りにて御服藏可被下候折角一新改革藩論を以て議する等の弊捨除の處或はこそ〳〵に周旋致候樣にては禍害の端を引に至らん吳々御注意可被下候全く小生蒙昧小意中より煩勞に過候樣には候得共天下全面論にては未た輕易に不可論もの有んか此際萬事日々に運候樣候へは彌以同心一體基礎定り候事不可疑ものと存候返す〳〵御兩人のみにて漏洩なき樣御申合可被下候何も可期面上早々如此候也

七月三日　　具視

佐々木殿

追て議事の事に至ては別に御談し可申件々有之候差急き候事には無之今日は申殘候也

五五　佐々木高行書翰「岩倉具視宛」　明治四年七月三日

尊翰奉拜見候卽刻は參　殿御配慮之御旨縷々御示諭不肖之私儀別而奉感佩候退出方直に江藤へ參候處幸に居合篤と御趣旨之處は内談仕置候勿論他人には決して不相洩樣精々申談し置候間右樣御安神被爲遊度候江藤之

見込には今般之處所謂大立ちたる制度御確定之譯に付五日を不出是非共
埒明候樣盡力可仕旨申聞候間此の段申上候也先は御請旁匆々頓首敬白

七月三日　　高　行拜

岩　公　閣　下

五六　岩倉具視書翰「吉井友實宛」明治四年七月四日

御書狀一見かねて御內意の義段々御申出之旨尙西鄕氏方も御懇談の末是
非一等下に被
仰付候はゝ御請之旨寔に乍殘心不得止內願之通被
仰付候事に御評決に相成候間此段內々及御答候右に付速に御參　朝御奉
職之事令懇禱候早々以上

七月四日　　具　視

吉井民部大丞殿

請

五七　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」明治四年七月五日

彌御淸榮欣然誠に過日は御草臥中彼是御奔走實に御苦勞其後江藤御出會
云々御懇談之末五日を限り精々御盡力の趣深辱存候內外御咄し申候通り
に付尙同人御申合此上一際御周旋被下度候昨日も木戸話に刑部彈正等諸
官人如何成行ものやらんと皆々去就にのみ煩念敢て御用筋も不運由困つ
た物右二省の事丈にても早く御發表可然被申居候幸に凡て速に運ひ候樣
申置候此機に乘し何卒早々諸省共に判然御決定の事偏に渴望候今日諸長
官集會の樣子如何に候哉何分巨細章程は一朝成功無覺束歟大綱の所丈御
取極めに相成候へは萬運動候に付吳々も宜敷御配慮の事御賴申入候仍早

々如此候也

七月五日　具視

佐々木殿

追て江藤招き懇談可致の筈に候得共却て如何と相憚り候間足下より能々御申合可給候也

五八　佐々木高行書翰「岩倉具視宛」　明治四年七月五日

尊翰下賜難有奉拜見候益御機嫌宜被爲成御座候旨奉拜賀候然は制度之義御懸念之邊々被仰聞候處江藤も大に憤發仕候得共今日迄之處は何分不揃にゟ運附不申候得共明日明後日は休日も潰し急速に爲運候筈に御座候尤井上聞多抔も一日にゟも早々相運せ候心組之趣にゟ頻に相競申候後藤も今日退出之節も何分早々片付度との申立に御座候間明日右府公初め御出席可相成に付御鞭策御差加へ可相成候はゝ存外に相運可申其中如尊命小規則は追々ならでは被行申間敷候尚此の邊之儀も一寸申上度候得共聊か相憚り差扣申候孰れ御都合を以可申上候得共何分共制度へ運之儀肝要に御座候間尚江藤初め一同へも盡力相成候樣乍不及可申傳候先は御請迄匆々頓首敬白

七月五日　高行

岩公閣下

追ゟ御密話之處は江藤而已尚又可申傳候以上

五九　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治四年七月上旬

御不例如何御加養專念候今朝は來駕恐縮之至りに存候扨制度取調之義も段々洪大之事に相成國法迄も溯り評議仕候事に評決卽別紙之通り決定候

賢慮之程いかゞと存候得共今朝御來命に任せ專斷仕候何分評議も所詮至急には六ヶ敷と存候に付司法臺發表來九日御達之手筈に取極申候間左樣御詳知可被下候猶此外にも至急に御運無之ゐは不都合之廉には且々御發表可然と存候大久保之處頃日不參制度調之次第も承知無之ゐは如何と心痛候間江藤に申付行向委細申入候樣命置候猶以今朝申上候事件厚注意不仕候ゐは諸藩之人心離畔之端にも相成候半歟と於僕は實に苦慮仕候大政一新之成る所以は唯公義名分之存するに依る事と存候得共獨三藩に偏頗せず公平同視之御所分肝々要々と存候就ゐは因阿賀肥之人々も人物に於ては決して三藩之下に不出候間同樣に御諮詢席を賜り公論を被爲採候樣仕度存候將又熊本藩申立之事件に付大久保心附之義御承知に相成候はゝ明朝相伺度存候先は右申述度草々如此候也

二伸制度調も明日は休息以後日相始り候由に御座候也

彈臺被廢候に付ゐは渡邊大忠進退はいかゝ可然哉御勘考被成置候樣希候

六〇　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治四年七月十二日

今日四字より出頭申入置候得共今朝御咄し秘密一件事にゐ條公方ゐ行向候間御斷申入候何分意外之大變革頓發恭悅と申迄もなく候得共狼狽急に夫々手筈申合候ため出懸候事に候早々如此候也

七　十二

大久保殿　　具視

六一　岩倉具視書翰「佐々木高行宛」　明治四年七月十三日

御書一見扨相良云々の事來示之通り舊藩へ預け候筈に候處彈正臺承引無之に付其儘差置今日に相成候行懸りにて不得已候間御省へ御引受可給其

候

上御所置も有之候此段可申入條公噂に候仍如此候也

七月十三日　具視

追て相良の外は夫々一段落相成居候由に候也

司法大輔佐々木殿

六二　岩倉具視書翰「佐々木高行等宛」　明治四年八月十日

今朝宍戸氏御參朝の筈今以御參無之御待申居候間更に申入候也

八月十日　具視

追て今朝の御書返事に巨細申入候若哉間違無之哉と存候也

佐々木殿

宍戸殿

六三　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治四年九月四日

前略過日御内話件々尚又御談し旁申入候

一家祿云々一家御取立の事今朝三條公より内話今明朝中決し候との事少々前議と可違哉に候得共尤可被行と存候

一兩人書狀幷家來可差立事夫々取計可致候右に付極内々足下御見込を以て小生文體ヶ樣にも候はゝ先方都合ならんと御見込之處御一筆一子案被下度候

一前條に付七日出帆時宜にゟ一兩日延引可相成哉是非七日治定に哉精々盡力心得候得共運ひかね候時の事に承り置度事

一昨年西下の時伊地知氏には面談不仕當度　召に應し此儘御滯在哉若し御歸國候はゝ御傳言も申入度又同人にも多年間苦心の事此上一際盡力老卿も御出府相成候はゝ天下の爲めいか計りと存候旁一夕小生出會如

何哉と存候有樣御咄し申入候賢考次第御返事可給候

右早々如此候也

九月四日

大久保大藏卿

内啓

具視

六四　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治四年九月十二日

鹽川の事未た決し不申尙面上萬々可申述候

前略過日御苦勞に存候昨日亦家扶御面働申入候鹽川も御聞取被下候事と存候

扨島津殿一家云々御沙汰書拜見候處かねて申入候分と相違如何哉と懸念候亦位階之處何等之事も無之不審也尙條公に可問合存居候事に候

英國新聞抜書入御一覽に候

右早々如此候也

九　十二

大　久　保殿

具　視

六五　岩倉具視書翰「島津久光宛」　明治四年九月十三日

秋冷之砌彌御安全欣然併兼而御持病如何に哉尙承り度存候然は去冬巨細之聖旨申進候通にて今更喋々不待論皇國前途之興廢安危は則薩長土之三力を御依賴被遊候中於閣下は故薩摩守殿之御遺志御紹述天下に先ち大義を唱へ身を以て難に當り東西奔走終に復古之典を被擧候御勳勞誰か其右に出る事を得んや故に于今頻に御欣慕被爲在候處之御誠意隨而三條小生等か請求する衷情も豈に閣下に私すると言んや兼而當秋迄御猶豫期限

之事に候へは果して一言之重を御表信且前條不容易　天意に被爲對御出京之御報知三秋之憶に候處今に御樣子不相分僕に於ては蒙命之任も有之今日に相成候ゟは實に茫然之仕合に候自然此度は御出京之事とは存候得共前件御汲量有之暫時なり共是非御拜趨有之度千祈萬禱仕候追々御承知之通　朝廷上之御模樣大に御變革殊に廢藩之令なとは五年十年を期した る事に候處時運之機循環する所以か一體之勢よりして意外之御運歩と相成候私情を以て論すれは何とか御挨拶可申樣も可有之候得共即今日新開化之世態に推及候上は結局此に至らすしては不相濟事にて　皇國之爲に は可賀之至に候是畢竟封土返上等其基を御開き有之候御至忠よりして實蹟今日に擧り候譯にて天下始て公平なるを知り耳目も一新致候勢に候僕等に於ても益御精忠之程感佩仕候事に候尚細敷は從家扶可申入と存候仍早々如此候也

九月十三日

具視

島津從二位殿

追ゟ何分舊冬奉　勅出頭之末小生には實に苦心罷在候次第何卒彼此御遠察呉々にも速に御出京之處懇願此事に候早々以上

六六　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治四年十月十六日

彌御安全欣然扨御内談一件昨日之末如何候哉御苦慮不少と推計候得共今日迄御施行之義都ゟ之成否に關係候大事件と存候條精々御盡力懇願此事に候今朝横濱行不本意此事に存候得共不得止今明兩日出張候別紙昨夜到來入御一覽候尚三條ゟ直に御談し可給候早々以上

十月十六日

具視

大久保殿　不及貴答

六七　岩倉具視書翰「大久保利通宛」　明治四年十一月八日

前略愚息代筆御斷　然は今日は二字御參御苦勞に存候實に餘日無之御用筋若取落ち等有之候ゟは遺憾此事に付山口申合せ精々無遺漏樣御配慮被下度候別紙春嶽書狀老婆心之樣には候得共誠實老卿之懇親亦不可棄此意味根底之處今日於政府總御名代にゟ斷然御申述御打合せ置偏御賴申入度候

一別紙伊藤書狀之通に付兼ゟ御談合三ケ條云々是非今明日御發表之樣西鄕大隈等ゟ御申談可給候明日條公板垣等ゟ段々申述候處條公には大赦云々之論も候得共板垣には小生見込至極同意に候尤兼ゟ御議論申候通りいつく迄も使節發遣之大擧上之條理を以申述候事に候此上は今朝以後之處足下御盡力有之度存候仍早々如此候也

十一月八日

大久保殿　　具視

六八　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治四年十一月廿七日

嚴寒之節御座處

皇家被爲揃益御機嫌能被遊御座奉萬賀候次に貴君始各位御勇健可被成御航海奉遙賀候猶以下官始百僚無異奉職地方に於ゟも異事無之總ゟ平穩有之候條御休襟可給候御序に大久木戸始へも宜御傳聲奉希候誠此般之御一行實に御大任職海外萬里御跋涉御艱苦も不少義に奉存候偏爲邦家御勵精御盡力企望仕候內國之義は乍不束微力に及候限は努力可仕候間御顧念無之樣奉願候爾來西鄕始日々精勤至極協和盡力仕於下官も安心仕候御放念奉願候先以格別申上候程之義も無之肝要之事件は別簡正院之公狀を以申入候條御諒知可給候追々御着米之期にも可相成哉御船中御安否如何奉想

像候猶後便萬々可申呈先任幸便一書拜啓迄如此御座候恐々謹言

明治辛未十一月念七　　實美

全權大使岩倉右大臣閣下

猶以時下向寒折角御自愛奉祈候賢息にも御無異御旅行可被成奉願候大亂筆高免可給候也

明治五年

一　岩倉具視書翰「鮫島尙信宛」　明治五年二月朔日

本朝總ゑ御靜謐

聖上益御機嫌克被爲涉御互恐悅此事候三條始在官無異奉職欣然足下にも愈御安寧御奉職令賀候具視始使節一行何も無異華盛頓滯在能在候間乍憚御安慮可被下候誠に意外之無音遺憾之事候得共萬端匆卒之仕合せにて不行屆尙左に預申入候

一本朝西鄕始應召奉職以來諸事大御變革御承知之通廢藩など非常之宸斷を以被施行候處存外混雜も不生總ゑ如命相運候得共多事極り候義にて吾等始　政府數員海外出張元より不容易事候乍去條約改定之期已に近にあり且此迄外國交際なるもの事あるの時に當りかつ〳〵之に應する位之義にて眞に交際に付貿易盛に專ら宜誼を以て專務とするの義にも無之旁

以内政略之大得失は略分明之義に付乍匆卒此より海外之義一途に用力させられ候　叡慮を以此度使節發行之事候然處如臣等外國之事に於ては無筆無法其上矇目聾耳にて諸事不都合纔にサンフランシスコより當華盛頓迄にても種々困却之事而已後悔候得共今更致方無之只百方力之限り勉强之心得候右に付ても森辨務使不一方盡力大に扶けを得申候元辨務使委任之權利も可有之處此義も不案内より色々不都合之次第有之當人に對し誠に氣之毒に存候足下も亦同斷なり然れとも此度使節之義は興廢を一舉に決候程之心組に付何卒厚く賢考補助有之樣依賴致候尤箇樣之義こと新らしく不申入候共元來御承知之事なから米國は諸事簡易致し易き事も有之哉之趣餘の諸國は中々難事之旨殊更に兼て御注意心付之義は精々早く御申聞可被下候

一米國滯在今より凡三十日計之見込洋暦四月上旬中發途に可相成哉尤御あてには不相成候

一バークス在國にて都合宜しかるへく存候得共兼て足下之儀に付云々御迷惑之筋有之候未此一條は如何と懸念候

一今度使節之御趣旨は大意之處都て伊藤より可申入筈相後れ候事不都合なから前文之次第御宥恕可被下候

一日本政府より第一號と第二號と使節發途後兩度之音信英郵便船にて差出候趣にて第三號之分而已此節米國船便にて着落手候處何分前號之封書未一覽不致有尾無頭樣之事にて彼是心配之儀も候處何卒着次第御廻し可被下候

一今度當國より英國に渡海之十日或十五日前副使之内一人か或書記官之内兩人計歟前着爲致萬事御相談心得候其節能々御聞取旅館以下厚御配慮被下度候何分始て之外行人員のみ其上隨行諸官員共多人數各不通言語不都合而已に無之不體裁も不少日本國之外聞汚辱に關係候義に付兼て等く御勘辨嚴全規律相立候樣依賴致候

一杉浦弘藏を以パークスより懇切之傳言其後又同人ゟ懇切之書狀深喜悅存候此度は大に世話に可相成存候條右等任宜御挨拶置可給候小生より御返事不致同人より一筆返答致させ置候右乍失敬御內用掛之者代筆申入候實は昨夜より當分之風邪平臥旁此の如く御座候申入度儀萬々候得共何分筆頭に難盡近日御出會を期し御相娛み屈指御待申候匆々以上

皇曆二月朔日　洋曆三月九日　具視

鮫島辨務使殿

追々多諸生共新約克迄出張夫々歐州夫々ゟ渡海之者ゟ此書狀相託候也

二　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治五年二月十五日

春暖漸催候處

主上益御機嫌能被遊御座國家平穩奉恭悅候各位御健康御旅行御勵勤可被成奉遙賀候定ゟ華盛頓御着後別ゟ御多忙御配慮御盡力之義と想像仕候然は今般評議之上士卒祿之義祿券之方を立政府に買上遂消却之方法目論見相決候に付國債を興し右祿券相製候筈にゟ米國ゟ二三千萬圓之借財取結候爲吉田大藏大輔助役としてウイリヤムス同行米國に發行仕候猶委細之見込委任之條欵等は縷々大藏省幷正院之公書に申入候筈に付自拙宜は委細は不申上候右は實に無此上至重至大之事柄にゟ事の成否により國家之盛衰にも係り候程之義に付其地にも照會を遂候上にゟ取極候筈に有之候得共何分士卒世祿之所置其儘にては方嚮も相定不申數百萬之國力を耗し候は前途會計之目途も相立不申今日之好機會を失候ゟは不相濟義に付反覆評論之上遂に前條相決申候條御諒察被下度候猶其上にも故障之筋有之候はゝ御急告相願度候尤前條借財相調候上は速に祿券消却之方法相施且鐵道鑛山等之築造も盛に着手速に成功を致候目的に御座候

一華盛頓府より我二月六日御發之電信便今日二月十五日十二字頃相達早速譯讀仕候

處御文意了然不仕依之數輩打寄種々翻譯評論仕候得共何分にも了解仕兼スミッにも相談候得共是以同斷唯種々想像を以御趣意柄相察候得共慥に了解難仕苦心最中に御座候態々電便にて御申越之事故定ゑ事機を失候ては不可濟急務とは奉存候得共前文の次第當惑仕候幸吉田大輔明日發途仕候に付同人に申含辨務使森有禮へ申入候積りに御座候乍併吉田着米之時節は迅御發米之後に可相成と存候得共無據先以右之通に申含候萬々御諒知可給候先は要用而已差急以寸札申陳候謹言

壬申二月十五日夜　　太政大臣三條實美

全權大使岩倉右大臣閣下

三　大原重實書翰「岩倉具視宛」　明治五年二月廿一日

壬申正月十日御認之御書當二月十九日入手畏令拜見候

聖皇益御機嫌克被爲渡恐悦奉存候　尊君御始御同行總ゑ御安寧海陸御旅行之旨恐悦此事に候御國內御靜謐御留守宅　尊大人知老夫人君御簾中御始御一同御安泰御安慮候樣存候政府在職の面々何れも無異隨ゑ拙宅老父始何れも無事小生も以御蔭無異奉職罷在乍憚御放慮候樣奉希候陳は御出帆後早々書狀敬呈仕候處一二の便英船に相託し未相達三號の便漸當正月十日御入手に相成候旨嘸々御內國の便御待受被爲有候處右樣行違に相成遠路無據儀とは申なから遺憾之至に存候漸小生之書狀にて尊大人御始御安泰之儀御承知に相成候旨右樣之儀にも候はゝ今少しにても委曲可申上之處後便之事故委曲も不申上不行屆候段恐入候幷御留守宅よりの御書も御催促申上同封に呈上候はゝ御安意にも可相成處不行屆恐入候御內には船便度々に御家令中迄御報知は申候得共　右府公は太政官中の御身に被爲在候故御書中總ゑ正院に被差出候に付小生よりは呈上不仕故に候此段御諒察希候尙自後は何れにも心配可仕偏に高

恕可給候

海上十一月來風波惡敷風聞に付御案申上相伺候處御意外に平穩太平海の名不空旨誠恐悦安心仕候且又御從者も御無人御案申上候處諸事外國は簡辨却ゟ多々御困り御尤之事以後海外行の者の心得に可相成事と存候

崎陽異宗徒之儀に付云々申上候處爾後之始末委曲可申上旨何も敬承候右は最早落着に相成候得共總て不都合之事にて御國威は不相立心外之次第に御座候時勢不得已候右一條は先便度々書記官迄に申遣最早御承知之儀と存候間贅せす候夫に付一寸申上候先年異宗徒者共三千人余諸縣ゟ御預けに相成候者此程御放免歸藉之儀大藏大輔より建言に相成候處正院にて悔悟改心者は其地の民藉ゟ編入又は歸藉等可差免旨御決定當省ゟ御下問相成候に付當省にては是迄御預地の民藉ゟ編入の儀は異存無之候得共元地ゟ歸藉は不可然先當分御見合有之度申上小生右一紙見込書持參仕其外委曲崎陽之事情申上候得共終に御採用無之歸藉迄も被差許候右御樣子にては先外敎御禁止も相弛み候姿に相成行末政府の御配慮を茲に相含相萠候と存候既に先般佐賀縣ゟ相移候六十人異宗徒者彼より彼是被迫不得已次第にて早々長崎縣ゟ歸復に相成候處有難事抔とは決て不思只耶蘇の御蔭外人の助けと心得大に相誇最早御免同樣之心得の樣子縣官にも殊外心外に痛心之樣子に候得共致方なく況んや先年御預けの異宗民即今御手を被替候には及間敷被考候處深き思召有之候ての事歟即今使節御談判の間外國の人心を取には至極に可有之候得共何分後年之一大難事と大歎息仕候賢慮は如何相伺度事と存候

外務卿輔ゟ御傳言の趣敬承委曲申適宜可申上被申答候卿には壯健孜々出省有之候得共輔には兎角不快勝にて間々不參有之候此程熱海溫泉入湯にて二週日被行去十四日歸京相成候得共何分十分快氣の樣子にも無之大事の御用の御人氣毒は固り惜しき人と存候」製鐵所　叡覽之節鐵火

飛散云々新聞紙に有候に付御痛心御尋御尤に伺候内地にては一向右様の風聞も不承小生も一向不存候處御書中にて初ゟ驚彼是相尋候處全く無根の事にも無之歟右は頗る相秘し有之様に被相考候併し格別の事にては無之御安心候様存候尚篤と承合せ後便可申上候御國

原朱書「本文相認猶承合候處少々火の飛候事は有之候得共格別の事にてはなく侍從は相避侍從長帽子を以て　主上を覆と云位の事は有之候由迄の事に候也」

内の儀細大となく新聞紙に書載申參候趣如何にも左様可有之　尊公御始桑港御着より之始末諸官員御出會饗應其外戯場御覽之様子抔委敷新聞に載せ右にて御様子を想像仕候事に候賢息賢孫御安泰にて御留學恐悦に存候右ゟ之電信線御往復之事も其文言の儘に書載し御親子久々にての御出會其悦可知と有之實に其委敷には驚入候定ゟ正月十六七日頃にはシカコ府にて御親子御出會御喜悦之事と奉遙察候令孫少々御手痛

之趣如何に被爲有候哉御大事御保護候様祈候昨廿日御留守宅相伺候處知老君御面會此程被爲進候御書狀拜見誠御委敷事感入候御多忙中實に御心を被爲用候御事と一同御感之事に候御書中中には堅き文字も有之御讀被遊難き處も有之小生に讀聞せ候様との御事故知老君御簾中御初其外牧山瀧尾等御列席之所にて小生讀上且御話し申上御一同右にて大概御分りに相成候御様子誠に御委敷事にて大々御喜之事に候定ゟ直に御返書參候事と贅言不仕候意外之雪にて大々御滯在嘸々御退屈と恐察仕候併し最早路も開き廿一二日頃には華盛頓府御着に相成候旨恐悦に存候其後之御様子如何と伺度御後便御待申上候蒸氣車も大使御一列は始終御乘詰にて御食事も被遊御自分物御同様之由誠に十分之御都合と存候肉食も始終被遊一向御困りも無之御様子誠御仕合結構之事と存候先便被爲進候御寫眞御狩衣之分御額に御仕立にて知老君御居間北鴨居の上に御掲けに相成御顔色如活始終室中を御熟視被遊候様相視ゟ一同

恐縮の心を生候抔と申し誠に能々御出來にて自然御内の御締にも相成
魔除の御札と等く至極結構に存候伊達卿ゟ之御傳言近日之内參り委曲
可申通候奥平君御縁談之儀は御内にも一向心得候者無之猶後便に委敷
（兎毛裘の事も可申通候）
御申越有之候樣存候小生より伊達ゟ相尋候て宜敷候はゝ可相尋候伊達
卿も一向參上被致候事は無之御樣子に候
御内國之儀事細大となく可申上海外に被爲在候ては日夜御心に被爲掛
候趣御尤之御儀と存候種々申上度儀も候得共大事件は大抵書記官迄申
入又日誌にも有之其餘細末事申上彼是御痛心有之候ては無用之事と存
し多分不申上候得共猶又相心得可申上候乍併別段大事件は無之候故御
安心之樣存候

一神祇省相廢教部省被置　伊勢兩宮を宮城中に被祭大教正（中小）を被置諸宗合
一の事共御下問に相成候處當省見込兩宮を宮中ゟ被移候は此上規模を
小に相成候譯なり其外種々の難事も出來可申又大中小教正被置教法に

管する事は一切に管轄候ては又々神佛混亂と相成可申右は卿參　朝に
て言上に相成其儘何等の御沙汰無之候一體右樣大事件は尚更大使出張
中御處分無之筈なるに如何之事やと卿輔も内々被申居候（右正月中の事なり）
一兵部省被廢海軍陸軍を被置候旨御下問當省異存無之旨建言に相成候
一大阪より京都ゟ鐵道被築造御布告あり
一鐵道の規則御下問近々通車御開に相成候趣なり
一大藏省御雇米人ウキリヤムス兄弟去十五日參　朝内謁見相濟弟ウキリ
ヤムス同十七日吉田大藏少輔と同船米國ゟ被差遣右は新に公債の事を
委任せられ吉田少輔を補助し右を盡力せよとの御沙汰なり千萬兩より
三千萬兩迄の事の由二階冠棚大和錦二卷を賜ふウキリヤムス喜悅無限
永々可重寶と再謝之（小生侍席聞之）
一支那條約一件に付柳原少辨務使兼任當廿九日頃渡海此度は始終不都合
無之樣と爲　國家祈居候事に候右條約中互に相助勢す云々兼ゟ御心配

ゟ廉昨廿日米公使より以書翰申越候に右新聞に有之通り（此新聞は清國の新聞と有之）ならは聯爲抗抵と云義に當り候云々と問合來候如何ゟ答に相成候歟不圖候得共大に心配ゟ事件出來と存候

一孛公使此度辨理公使に相任しゟ旨にて濱港着に付明廿二日參　朝に相成候孛も獨逸皇帝と稱し王政復古と云吹聽あり一笑の事に候國勢盛昌逐日て相見ゟ候御心得可有事と存候昨冬御出發節各國ゟ使節御差立ゟ旨報告に及候處此節何れも返翰到來於我政府鄭重に可相待旨にて誠珍重恐悦ゟ儀に奉存候且此節は各國公使も多歸國中に付各別六ヶ敷談判も無之候併間々には大藏省との間に難事出來談判の六ヶ敷事も有之候得共諸藩債も多分片付訴訟も餘り無之大に間暇の姿に有之候

一去十五日拂曉より西城大手門ゟ行者體者十人（悉白衣なる者）亂入候に付番兵差留候得共不聞直訴致度旨に付歎願ゟ儀は其筋ゟ可罷出種々申諭候得共承服不致然は願書にても有之は取次可遣旨申候ても願書も無之旨於番兵も何とかして捕縛ゟ心得に候得共終に拔刀に及ひ候に付不得已五人砲殺に至り乃五人即死殘五人は召捕に相成候其上相糺候處何分巨魁相倒れ候事故何事やら頓と不相分殘五人は只々隨從して參候計にて何も不存との趣實に分らぬ者も有ものに候得共此節人々自主の權とやらを被下候折柄右樣ゟ事に相成候者實以憫然ゟ至と存候其外怪敷は高天原の使と申候由且宮城門内に流血候は實に千歳ゟ遺憾に存候右は是迄ゟ事にて別事は無之最早御安心ゟ樣存候右翌日英佛公使より狼籍者速に御召捕に相成恐悦ゟ旨申來珍敷事御一笑と存候

一御地の時候は如何有之候哉御國内當春は實に不時氣にて十九日の暖氣は七十度位迄昇り其夜より翌日に掛暴風にて九十度迄下り寒雨如冬季實に可歎事に候梅花は十分に咲過き候右時候故一向不宜候櫻花未催候當年は珍敷異邦にて花御覽又御一興に存候御話し伺度事と存候御同行始終御安泰ゟ趣恐悦に存候於　尊公は別ゟ爲皇家御自愛被爲有候樣伏

ゐ奉希望候前條有用不用相混し申上恐入候得共御用繁中態々ゑ御書中に感激仕り且事細大となく可申上樣御垂命に付嫌疑を不避申上候事故右等は御差含にて御取捨偏に奉希候中には未發ゑ事も有之右を六さと小生より何かに申上候樣にては實以恐懼候得共唯々仰に隨候迄に候得は吳々御差含奉希候餘は尙期後便候匆々頓首稽首百拜萬拜

壬申二月廿一日認　　大原重實

右大臣閣下　侍史御中　平安

岩倉具綱殿ゑ申入候別段書狀呈上不仕失敬高免希候內地事情は前本文にて御承知希候

香川兄其外ゑも可然御傳聲希入候也

一新地券御規則御發表に付老父屋敷も返上仕御恩賜の兩國地所に此節普請取掛富士も日々相詠め實に天恩の程謝に無他尊君迄御禮申上候老父より書狀差上候筈に候得共差掛候儀尙後便に可申上失敬高免小生より名代御禮申上候大東寶鑑と云者當省官員にてこしらへ候に付三冊差上候具綱君香川兄及東久世ゑ乍御面倒御傳相願候

御申越の御品々差立方御規則も未御定無之故差支大に相困り候漸々都合出來御廻し申上候也

四　大原重實書翰「岩倉具綱宛」　明治五年三月四日

天皇陛下益御機嫌能被爲渡恐悅奉存候　尊君御始御一列愈御清榮海陸御旅行恐悅ゑ至に存候御內地御靜謐御留守宅　家君知光院樣御始御一同御安泰に被爲有候間御安慮候樣存候隨ゐ拙宅老父始め何れも無異罷在小生義も以御蔭無事奉職仕乍憚御放慮奉希候陳は先便申上候後別段ゑケ條も無之候正月廿二日鹽湖府御出發廿六日シカコ府御着廿九日華盛頓御着其

後種々御配慮之事共に奉存候萬々御都合克此節は最早御用濟にて歐洲ゟ
御渡船と存候外國々にゟも米國同樣御接待申候事や又々政府々々之見込
も異同可有之候間如何之御模樣にも候哉と夫のみ日夜御案し申上候鹽湖
府御滯在中御便之後未何等之御便も無之唯々鶴首御待申上候事に候
一御國内是と申上候程の大事件も無之候得共先便申上候西城大手門内に
於て亂暴人之事只々行者一遍之頑民と存候處豈圖らんや大虐不道者にて
元來は木曾御嶽之行者利兵衞と云者にて聊魔術も使ひ同志十人を相誑し
脅從候其主意は近來日本に於ゟ肉食流行土地相穢れ諸神之居所無之間暫
時自分之舟中ゟ天降り賜ふ抔と申唱夫より同志申合せ直訴之事に決し神
領如舊且神佛混淆諸侯領地復舊夷人追討之事直訴之上御採用無之時は恐
多くも玉體へ迫り可申抔と申合候趣右委曲は書記官迄差遣候賊之口書に
ゟ御承知之樣存候實以けしからぬ者も有は有者に有之候最早追々開化之
模樣も拜見候處ヶ樣之領民尙有之右樣之事件有は實以御國之恥辱と心外

之事に存候乍併聊開化之効に候歟右同志之者何れも皆百姓町人之子にて
士族と云へは卒とても同志中に無之は開化之徽力と存候是が右樣愚なる
致方故ヶ樣之事にゟ相濟候得共若御通行之節於途中
乘輿に相迫候ならば如何可有之歟實以今度は天幸と存候此上は何卒右樣
之領民無之樣敎化之行屆候事偏所希望に候
一去二月廿六日晝後四字頃より和田倉門内兵部省添屋敷より出火候處折
惡敷昨今暴風殊に其日は烈敷西北風吹立出火否や飛火堀堤を越舊增山織
田林之邸へ移り卽時に燼上り舊德大寺坊城土州邸不殘燒失兵部省は荷長
屋燒失夫より又外堀を越市中に移り北は京橋南は尾張町三丁目に至り不
殘築地過半燒失殊に當省官員築地住居者多く勅任官にて二軒奏四判十七
其外小頭とも掛て都合三十五軒燒失殊に氣毒千萬に候寺島山口（舊邸殘り新宅燒）
宮本石橋子安鄭等宅類燒失候其中にゟ幸不幸有之柳原花房抔は殘り東久
世は無難澤は燒失東久世は廻り燒たる中にゟ殘り澤は廻り殘りたる中に

ゟ燒失實に幸不幸有之ものと存候寺島抔は兩度迄の燒失にゟ實に當惑無限何共氣毒ゟ事に候翌日　思召を以宮内省より二百金下賜候其外工部省新舊ホテル館燒失伊達も圓燒西洋形の亭も燒其内に支那西洋の珍器類藏置候處不殘燒失候由誠氣毒千萬無申條候此節は今戸ゟ別墅に移住被致候扨乍末尊邸は誠に御幸運にゟ御無事に被爲有候右萬一全ゟ北風計に候半は迚も御邸は危く御座候早速相伺候處早々御手廻も御出來にて安心仕候御方にも何御障りも不被爲在御子樣にも格別御驚もなく誠恐悦に存候其前日に　思食を以て御屋敷御拜領に相成恐悦右御祝一獻被召上候處にゟ小生も頂戴畏存候實に御天幸御安心ゟ樣希上候

一支那條約中ゟケ條に付各國公使ゟ尋問有之趣先便申上候處右ゟ箇條は近日相改定ゟ談判に渡候旨返答に相成候

一去二月廿七日米國へ御賴に相成候御家具組立方出來に付セハルト代理公使にも兼て右は種々配慮候に付内々拜見として宮内省へ參内との旨心得に同省より達有之尤内々にて公使ゟ職を離れての事故外務省にては關係無之大少丞ゟ内にも參内ゟ時添不仕候

一舊和歌山藩に於て獨逸兵學教師雇入に相成候處御國内兵制一定ゟ御規則出候に付右破約に相成其に付夫々償金和歌山藩より差遣又相賴候銃砲器械類濱港へ送越候に付右買上代金二十五萬ターレル差遣事に約定其上右事件に付ビスマルク始大配慮致周旋せし者へ二百兩以上ゟ太刀一振宛挨拶として相送候事に決し此節右太刀取調居候色々行違多分ゟ御入費歎息ゟ事に候

一魯國王子西洋各國巡回後　本朝にも渡來ゟ趣新聞に評判有之候眞僞如何哉尚伺度有之

一卿士幷に卿中にゟ舊家々柄ゟ者士族に相列旨御布告右は門地を廢かと思へは廢にてもなく又新に出來候樣にゟ如何ゟ御主意やと疑惑仕候且又兼ゟ買賣に相成候祿券ゟ義も被禁候然は愈世祿ゟ事に御決定か疑惑仕候

何れ物には利害之有ものにて種々御心配之事と恐察仕候

一此節仙臺縣に御預け有之暴宗徒之内土州士族某なる者右宗旨を相唱候處數日ならすして其宗旨に入者百四五十名有之因而右頭取たる者七八名召捕に相成候旨内々承候實に教法之義は後來之一大難事行々格別に尊慮を被勞候事と今より痛歎罷在候先達悔悟者は御赦免御布告に相成や否間もなく右樣之義出來實に憤腕之至に候

一地券御發表土地も夫々私有物と相成人々自主之權を得有難事には候得共政體一變之形勢と存候老父義も恩賜之兩國邸にて日々風景相詠好天氣には兼而望之通り富士を觀實に世之憂事を忘れ世塵之事も大抵は耳に不入樣之事にて聊所勞不快抔も無之日を相送候此節は新建に取掛其是見廻り差圖抔致し相樂居實以老年之樂之に不過五六年之壽命は延候事と存候是全　天恩と尊君御配慮之賜と子孫之身に取如何計か有難存候御禮申盡し兼候去一日には兼而御約束申候通知光院樣初島槇山豐田瀧尾等船にて向島迄御誘引申上花も十分の處天氣も都合克一入御樂に相成大慶仕候木母寺にて御休息御歸掛老父拜領邸へも御立寄於老父も大慶仕候御留守中御老人方何そ御慰にと存候得共一向行屆不申漸右樣之事に有之候且又廿四日は堀川富小路小生御邸に御招一同宗族迄も相召愚妹愚妻迄も罷出段々御丁寧之饗應に相成何共恐入畏存候右御禮申上候御邸之花も十分に御座候漸此節より時候も定り諸方花も十分に有之候當年は珍敷異邦之花御覽に相成其に付而は御國内之花も思召出し賜候半と恐察仕候

一兵部省被廢海陸兩省被置候鐵道御規則も定り不遠運轉御開に相成候旨に候御内地總而御無事に候得共兎角兵卒亂暴相働き屢外國人へも無禮仕掛候て内外人民殆困却候外國人に對追々如何之處業相働か此上如何之事に可相成又々政府之御配慮を可相釀と當省も一入心痛仕屢々建言も候得共兎角兵部省不取締政令不行屆爲國家憂慮仕候

一於蘭國御國人三百人計兵卒に雇度旨先達公使より大輔且尊君迄へも願

置と抔と云々申陳候へ共卿輔より斷然理に相成候へ共定て於其地彼是可申立と存候猶御含置御應接有之候樣に存候

一自余別段申上候程之義も無之尚期後便候爲國家萬々御自愛之樣偏奉希望候頓首百拜

三月四日　　大原重實

岩倉具綱殿

追て本文右府公に可然被仰上候樣希上候香川兄其外御隨行人々に御鶴聲是亦希候也

五　三條實美書翰「岩倉具視宛」明治五年三月十六日

春光暖和之節

主上　皇后御機嫌能被遊御坐東西京各地方靜謐有之候御安慮可被遊候各位彌御健實御勵務可被成奉遙祝候政府諸官員無事奉職有之候條是亦御放念可被下候當節公事之義は御用狀にゐ御承知可被下別段に不能呈出候米國御着後如何之御模樣に候哉華盛頓御着後之御消息無之日々屈指渴望仕候定ゐ不一方御盡力之御義と想像仕候偏好都合に在之候樣所望仕申候扨御國の事も種々新聞等御聽に達し御懸念も有之候半と存候　此節攘夷論を唱へ或參議中を暗殺致歟抔申唱へ烏論の擧動も有之速に捕縛遂糺彈候處全金策等之惡計より妄誕之論を以て人心を皷動致候樣之事にゐ更に懸念仕候程之事にも無之候得共兎角浮說流言海外に傳播誤を傳へ候樣にゐは外國にゐも疑念相生御交際上に關係仕候ゐは不安義と苦心此事に御坐候併更に實事心配之事も無之候間　御安慮可被下猶御含にゐ御辨解希入候今便詳細書狀も差上可申之處小生も少々頃日不快に罷在何分執筆も甚困却仕乍失敬誠に一筆御安否相伺候迄如此御坐候尙後便に萬々可申上候匆々謹言

三月十六日

實美

右大臣全權公使閣下

六　大原重實書翰「岩倉具綱宛」　明治五年三月二十日

聖上益御機嫌克被爲成恐悦奉存候　大使公御始御一同御安泰恐悦に存候
陳は先便一封呈上仕（去十七日出發）未時間も無之別段申上候程之義も無之候得
共一寸一二件申上候
一米國水師提督ロッチルス差配する軍艦に　臨幸之義昨年尊君御配慮之
事も有之此節右軍艦入港に付　臨幸之一義請求有之候右請求書翰に各
國帝王は必參る例の樣に申述有之候得共當省御雇法律家スミッの申に
は各國帝王行く例と云事は更に無之只行とも行かぬとも帝王の心次第
にて他國の軍艦に行ぬは魯西亞帝のみ自分研究の爲に行候にて他に擁
せられたるにてはなくとの事なり因て未た御用意相調はさる旨を以て
御斷に相成内謁見之義は昨年之通り御許容に相成候此度は内謁見之義
は昨年之通り御許容に相成候此度は内謁見之場所は元兩面御茶屋此程
御營繕に相成候西洋風造りの御場所にて謁見之義略御決定候日限は廿
四五日頃に有之候右は昨年御配慮之末に付一寸御心得迄に申置候
一先便略申上置候元仙臺縣今の宮城縣にて異宗徒之義右首唱者召捕に相
成其外右説法聽聞者一同恐入夫々所置相成候得共其前脱走者東京にて
猶講説せる趣右委曲宮城縣より屆の寫書記官迄相廻候間御一覽之樣存
候ケ樣に蔓延候ては行末實以痛歎仕候尚篤御勘考有之度存候
一澳國の博覽會に御差出に相成候御國産珍物類種々御取集夫も開化之一
御尤にも候得共實に多分の御入費にて其實有用不用の深き御考もなく
遠き國々迄人を被出御求の御樣子今の御樣子なれは千萬兩位の御入費
は掛るなと風評仕候終には御國益とも可相成候得共卽今米國にて新に

御國債も被爲成折柄右樣多分之御入費も不被爲厭は如何之御事や痛歎之至に有之候何卒出來候丈之事にて今度は相濟候樣致度と祈候事にて東西京展覽會も盛んにて諸人智識擴充の一とも相成珍重に存候此程英國より當年より八年間毎年展覽會相催候旨にて右規則摺物差越候同國ゟ御入の頃は定而御歷覽之事と存候

一大久保卿伊藤少輔歸　朝も未た無之此兩三日着港に相成候米郵船にて歸　朝に相成候事やと日々踵首罷在候　尊公には時事實に御痛心之事と其のみ日夜御案し申上居候御內地此三四日連日風雨にて誠困苦鬱然候西洋天文家說に當年は回年にて支那日本は彗星の引力にて大洪水を興し前世界の時の如くなるへしと云し其地にても右風說有之候哉右樣の事も有之候ものや此三四日餘りの風雨にて少しも雨のやみま晴間無之如何と存し候且時候も兎角不宜困入候其地は如何や何分爲　皇家御持重御自愛千萬相冀上候匆々不莊頓首百拜

壬申三月二十日

岩倉具綱殿　　大原重實

本文大使公ゟ可然被仰上被下候樣希候御隨行香川氏始ゟ御傳言宜希入候也

七　大原重實書翰「岩倉具視宛」　明治五年三月廿八日

天皇陛下益御機嫌克被爲渡恐悅奉存候　右府公御始使節御一同愈御安泰珍重恐賀候御內地益御靜謐御留守邸　尊父君知老公御始御一同御安宇御安慮候樣存候小生宅老父始何れも無異小生も以御蔭無事奉職罷在乍憚御放慮奉希候陳は賢息御儀御都合も被爲有大久保卿伊藤大輔と共に御歸朝にて去廿四日濱港御着船直に御歸京に付早速相窺得拜顏候處船中何等之御恙も不被有且君公御安全華盛頓御在留之趣相伺安心仕候種

々御樣子とも相伺且悅且御案し申上實々一方ならぬ御配慮奉恐察候賢息山本も御歸朝之上は御隨從も御無人にて一入御淋敷御事且御不自由と恐察仕候何卒御大事に被遊候樣希上候大久保伊藤歸朝之儀條約改定一條云々之事とは略側聞仕候得共何分小生輩には何等之御評議に候哉一向拜聽不仕不相分候へとも實以御大事件と恐察仕御痛慮之程奉察候最早英倫敦ゟ御渡航とも傳信之風說も致し又は御返事を米國にて御待とも申如何被爲有候哉に御案し申上候且又相伺候へは當地より之便は兎角不相通趣にて色々御痛慮被爲有候旨右は御出帆後郵便度毎に指たる事件無之とも一封は必差立候處三四號之外更に不相達候樣子如何之事やと痛心仕候一向書狀も不差立實に懶惰之樣可被思召掛者痛心仕候得共既此便とも二十五號迄差立之義に候得は此段は御承知希候併し最早追々相達御覽に相成候義とは存候得共尙鮫島辨務使ゟも取調候樣申達之義に有之候實に長々之御滯在に相成御鬱然に恐察仕候何卒一日も速に御用御辨に相成御歸之義其のみ御待申上候令孫兎角御不快之御樣子實に御案し申上候後便には御歸朝に相成候趣不遠可得拜面に相樂候折角是迄御勉强之處中道に御歸國之義何共殘念之至に候併し南北兩公子には御壯健御勉勵之趣恐悅に存候尙不遠內歐洲御巡廻と奉察候吳々爲國家御自愛御保護奉冀望候御內地別段變候事無之贅言不仕候匆々頓首百拜

壬申三月廿八日

大原重實

右大臣殿御侍史中

八　佐々木高行書翰〔岩倉具視宛〕　明治五年四月四日

英國倫敦より一書拜呈仕候

閣下益御多祥可被爲成御坐奉拜賀候　隨而私儀西曆四月廿二日新約克發

船五月三日英國レハホール着同所裁判所一見仕同月五日同處發途同日倫敦着仕候乍憚左樣御放意被成下度候然は同月十日公使バークスに出會裁判之事務取調之義談話仕候末同人より申聞には此頃用向相濟近々發途之心組に候處　閣下最早御着に可相成と存し是非倫敦にゟ御面接致度よつて御待受罷在候處意外御遷延に相成りいつ迄御待受候ゟも確と何月何日頃と申義相分兼候其中西暦七月初旬に相成り候はゝ諸官員等避暑爲政廳相休夫々都府を離れ他行いたし彼是不都合も不少候何分共急速御立越に相成候儀希望仕候乍併余り御延引に相成候御模樣に候得は發途仕追ゟ御歸國之上東京に於ゟ御目に掛り可申樣可相成哉とも存候得共何分共英國へ御立越之期限不分明に付進退決し兼候間高行より慥成處　閣下へ相伺呉候樣申出候（高行へ期限之義相尋候に付日本五月中には着し可相成相答候也）此旨申上候間凡その期限高行迄御示し被下度候　扨同人儀兼ゟ大不平云々承り込居候趣も有之候得共面接之節は甚懇意に致し候へは取納之義に付ゟも屹度盡力致し呉候光景に御坐候一體之處にゟは今般使節御立越に候へは厚く盡力可致心事と相察候得共餘り米國に御滯在に相成候故内意には懸念疑惑を抱き候口氣も有之候得共高行出會之節は平穏に御坐候乍併平素之氣質に付何共申上兼候得共前件之次第に付其儘申上候尚又近々面接自然御參考にも可相成議等承り込候はゝ早速可申上候得共先は右申上度匆々如此御坐候恐懼謹言

西暦五月十日

佐々木高行拜

岩倉右府公閣下

九　大原重實書翰「岩倉具視宛」　明治五年四月十四日

聖上益御機嫌克臨御被爲有恐悦至極奉存候　右府公愈御安泰恐悦に奉存候御内地益御靜謐御留守邸老公御始御一同御安寧に被爲有御安慮候樣存候小生以御蔭無異奉仕罷在乍憚御放慮希候陳は此節は差て申上候義も無

之昨十二日には
皇太后赤坂離宮（元肥州邸）に十字後御着に相成誠道中何等之御障りも不被爲有御機嫌克御着之旨恐悦此事に候
主上には十一日品川驛迄　皇后には大森迄御迎に被爲成誠に眞に御親子之御情誼を被爲盡候御事開化之效と恐悦に存候事に候去八日獨公使於内宮拜謁右は孛佛戰爭之節之情態を寫眞に取り數枚獻上右演義を於　御前直に言上致度旨に付於御學問所右演義直に被爲聞召候誠に珍敷事にて御場所之義も彼是相談之上何れも不都合に付未た類例も無之候得共同所にて謁見之事に決し候實に兩國御交際上に取候ては十分之事開化之效恐悦に存候右休所は例之通山里にて煉土坂を降り同所廊下より昇り相進候英公使アダムスも近日歸國（孛國一等書記に任す）に付御暇乞として内謁見右も山里離宮不都合に付於　小御所内謁見有之候誠に同所とは都合克誠御交際之厚き恐悦之事に候獨逸公使も近日歸國大使公を御待申上候趣に有之候大久保卿伊藤輔歸朝後條約改定之義に付種々御評論も有之旨に相伺候得共何分御決定着兼諸公御配慮之義と存候大使公御始の其地の御應接書拜見仕實に御苦慮之事と奉察候何分六ヶ敷事件のみ何と申上候て宜敷やと大息のみ仕候外務卿輔にも實に心配之樣子に相見ゆ候去九日於歐洲條約取極御決定米國よりも出張之義米政府ゆ御請求に相成候旨電信にて御通に相成候且御内評も有之候旨（此文相認候處却て御疑惑にも可相成且御秘事故恐入相消候ゆ免願候）噂に承候愈如何相成候やと存候且此上之御使節之御都合如何可有之哉一向御案し申上候何卒萬々御都合克御用御勤にて一日も早く御歸　朝之程奉待上候魯西亞コンシユルセヲラルビユツオフ此度横濱ゆ到着追々同國御交際も盛んに相成ケ樣被相考魯國王子も渡來之風聞も專ら有之少々其用意も仕候事に有之候前文云々は（前同樣相除）實に御未定歟誠の御密議故御差含願度小生相洩候樣にて恐入候間左樣御承知相願候此程箱館にて魯西亞人耶蘇教説法に及ひ内國人數十人聽聞に詣候に付開拓使にて悉召捕之趣に相聞候實に眞事に候はゝ誠不容易事件又々相生し宗

敬之儀には扨々困却痛心之次第に候又此節新潟縣下に去五日頃より也土寇相起り典事矢津も竹鎗にて負傷候旨に候右人數は萬餘にも及候得共畢竟愚民共之義格別之事にも到間敷候得共何分開港場之義に付當省にも彼是配慮致候事に有之自余別に申上候程之義も無之候御留守宅御用相伺候得共先便にも御用無之由故不差上候左樣御承知希候御内地漸薄暑相催芍藥も盛りに相成候其地は如何有之候哉且時氣之御障りも不被爲有候哉萬々爲國家御自愛相願候匆々頓首百拜

壬申四月十四日　　大原重實

右府公御侍史中

追啓　令孫未御歸朝無之種々御案申上候定而此兩三日便船にて御歸朝之事と存御待申上候實に長々之御滯在嘸々御欝悶と恐察仕候大久保卿伊藤輔も何頃發船に相成候哉未相分り不申實に痛心之至種々と御案申上候右樣の事に候はゝ此度之御用は御勤無之方遙にと存候誠心外に存候也

御側の人も御無人にて嘸々御不自由と恐察仕候偏に御自愛相願候也

一〇　鮫島尚信書翰「岩倉具視宛」　明治五年五月十三日

謹呈爾後益御安泰奉恭賀候然は先般御尊書被下候處西暦六月初旬御地御發程之由被仰下候に付其折返書も呈上不仕候處其後電機御報にては又々二ケ月程も御滯留之趣被仰下候處「當洲各國政府にても折角御來航待上居候へ共甚御延引相成只一國に而已長々御滯留之儀大に不審を生し候樣子にて御交際上にも不宜儀に奉存候間何卒御用濟相成早速御發帆之程奉希望候」且又先般鹽田大記を以申上置候「通當洲各國政府之趣意は米國とは大に相違候廉にも御坐候間今般御條約之儀は凡て御地にて御確定無之候て當洲へ御來航之方萬端御都合と奉存候間尚又申上置候將又前日大久保卿

伊藤大輔暫時歸朝被致候仔細も風聞而已にて篤と領承不仕尤其後兩氏よりゑ報御落手被爲有候はゝ拜聽仕心得居申度奉存候餘は拜芝ゑ上萬緒可申上如此に御坐候謹言

壬申五月十三日

岩倉大使閣下　　鮫島尙信

再啓英國にゐはバークス幷アストンを今般日本使節應接懸りに命申候樣子に候佛國にゐは近々に用意ゑ樣子候間御地御發期御使定相成候はゝ早速御報知ゑ程奉願候

一一　大原重實書翰「岩倉具視宛」　明治五年五月十五日

聖上益御機克被爲渡恐悅奉存候大使公御始御一同御安寧御旅行恐悅ゑ至存候內地益御靜謐御留主邸家君御始御一同御安寧御安慮ゑ樣存候隨ゐ小生以御蔭無異奉職罷在乍憚御放慮希候陳は當節別段變たる義も無之可申上程ゑ事無之候得共此節より條約改定ゑ義に付種々ゑ議論有之兎角一定不致一同痛心罷在候處漸に略御決定當十七日副使幷大辨務使も出帆に相成候事に決し先は安心仕候定ゐ其地にゐは日夜右ゑ左右を踵首御待ゑ事と恐察仕候最早改定全權も御委任に相成候上は是より十分御談判にも可相成追々事實は御運ゑ事には可相成候得共是より又々一段ゑ御配慮に恐卒御持重察申上候何御大事に被遊早々御成功ゑ上御歸朝ゑ程夫のみ御待申上候實に嚴冬より酷暑に向ひ又々嚴冬にも不相成は御歸朝にも至る間敷候實に御心勞御察申上候將又來廿三日には

主上にも軍艦に乘御大坂中國西國筋御巡幸に相成日數は三十日位多分六月中には還幸に相成候趣實に御盛なる事驚入有難候舟に御醉被遊候義は更に無之由實に奇妙と申候も恐入候得共如此時節に御世に被爲出候も道理ありと感歎仕候敎部省被爲置從前ゑ大僧正連大抵權少敎正に被任日々

元々神祇省當時々教部省へ出勤致し又々神佛混淆外見には如何にも可笑敷相考候得共是亦時勢不得已に出候と存候東本願寺權少教正に被任日々馬車にゐ出勤頗る威勢よく相見へ卿輔も不及樣にて可笑存候右教法に付ゐは兎角六ケ敷事のみ相生し先達申上候宮城縣仙臺のみならず又々箱館開拓使との一條相起り誠に六ケ敷事に有之候右情實は其手續寫し書記官迄相廻候間御覽候へは相分可申併追々寛大々御取扱に相成候旨此後は只敎を以て之を禁して法を以禁せすとの御樣子至極御尤々御事に相考候左候へは先以穩にて安心候得共始終六ケ敷者に有之候外務卿にも右一條には實に痛心々樣子に有之候殊に是は魯國敎法との事故一入心配々義に候得共幸卿には魯公使とは兼ゐ懇意々義に付先は話も出來易き姿に候得共始終可恐者に候右樣々義不絶有之候ゐは御出行中何程々御迷惑に可有之と何れも痛心罷在候精々心配仕候義に候乍併最早右樣々義は自然に無き樣可相成候間深くは御心配にも不及と存候乍併何れ右々敎法は遂には國中へ蔓延候は必然々義是乃可憂々第一に候敎部省をも被置精々御盡力は有之候得共迚も六ケ敷ものと憤歎々至に存候英代理公使内謁見々節立禮々義に付彼是異論申張候末去四日參　朝も所勞にて御理申上候然處米公使セハルトも同樣々義申出候に付去八日謁見水師總督同伴參　朝々處御不例を以御斷に相成候處彼にも疑敷存候か種々申述候末遂に自の非禮なるを知ゐ於目前書翰を引裂候に付九日參　内御許に相成然處臨期思召を以立御に相成公使にも右御特遇に大に感喜致し御國渡來以來始て愉快なりと申候右々應接々次第は書記官迄差廻候間御覽に相成候樣存候次て英公使も米公使の首尾能參内相成候ゐ羨み所勞本復候故更に參　内相願度申出候最早我意を止非禮を以迫らず願候事故今十五日午後二字内謁見御許に相成魯公使も午前十字に參　内致候且同國水師提督も來十九日頃には參　内致候事に御内決候此度參　内に付ゐ々談判は十分勝にゐ卿の盡力感入候誠に御都合克事と恐悦に存候就ゐは是迄着御々儘禮を被爲受候

處自後は立御ゟ事に可相成乍併立御も着御ゟ　叡慮次第にゐ以後御改に
相成りたりと云太事にては無之此段は能々御承知置有之度候魯國第三皇
子も近々渡來ゟ趣に付宮本小生も御用掛ゟ心得にゐ夫々取調に取掛居延
遼館も追々修繕を相加候渡來候上は英王子同樣御接待首尾能相濟候樣今
より相念居候事に候乍末令孫にも去四日着ゟ郵船にゐ御歸朝に相成早々
相伺候處外より御見受申候處にゐは格別にも無之御平生通りゟ樣に候【得
共醫師には格別御案事申上候樣申居候何卒徐々御保養に相成候へは近々
御快復には存候折角是迄御勉强ゟ處中道に相廢候義實に殘念ゟ至に存候
得共餘り御勉强に過ぎ却ゐ御健剛を相害し候故殘念ゟ至不過之乍併何分
御壯年ゟ義必御平腹は不容疑事御安慮ゟ樣存候將又重實義尊君御配慮を
以當省七等出仕被命實に御高恩冥加に餘り　天恩ゟ報方も無之素より頑
愚者何以か　天恩に報せんと只日夜苦心只々勉勵を以報する外無之と勉
强のみは仕候得共何分愚鈍にて御役に不相立一向に心痛仕居候處不圖も
一昨日十三日六等出仕に昇進被仰付實に驚愕仕候小生輩昇進抔は存も不
寄義尊君御歸朝迄勤續相成候得は有難と存居候處實に不圖の義恐縮ゟ至
に候段々御理も申述候得共此度寺島大辨務使として派遣に相成省中も御
無人に付楠本宮本□□（不明）を大丞に石橋子安平井を少丞に被任小生も有難も
其内に御入れに相成候義强て申辭候も却て恐入實に心配なから御請申上
候全是尊君より卿輔ゐ御遺託ゟ御蔭と彌以感佩仕候御禮申上候一應相伺
候上御請可申上存候得共何分一同ゟ事故御請申上候事に御座候此上は尙
又勉强を以ゐ相報ゟ外無之實に有難々々恐入存候猶千萬御敎誨偏に奉希
候内地近々薄暑相催候其地は如何哉時氣千萬御自愛ゟ樣奉希望候匆々頓
首

壬申五月十五日

右府公御侍史中

大原重實

今日只今外務卿ゟ御話に右は昨夜ニコライ教師と話ゟ都合至極無難に
ゟ最早格別ゟ心配には不相成との事に候卿ゟ談判には實に感入候尊君
ゟ此卿を御鑑定是亦實に感入候過日來申上候と存候處右次に申上候也

一二　吉井友實書翰「岩倉具視宛」　明治五年五月十七日

任幸便一翰呈上仕候先以
聖上益御機嫌克被爲入恐悦御同慶此事に御坐候近頃に至り彌御英邁ゟ御
氣象顯然御安堵可被下候委細は大久保より御直聞可相成と省略仕候御内
儀向も今般一層御變革相成一二典侍初め三十六人御減少後宮向は　皇后
御一手に相成候彼禁中ゟ女房と申樣候間一塊有之候ゟは　朝廷上永年ゟ
御煩と始終存上居候處此節百年ゟ害を御除き相成實に恐悦安心仕候右御
變革已來は　皇后餘程御憤發にゟ　御上ゟ御服等迄御手自御始末被遊候
位且追々御二方樣御一緒吹上に被爲成誠に難有次第御坐候宮内丈は何も
御懸念被下間敷急々申上度儀如山候得共難盡筆紙唯々御歸朝ゟ上現場を
入御覽御悦び可被下と夫のみ樂み罷在申候從來ゟ御容子を御存ゟ御方な
らては御分り無之事に御坐候右御寛旁如此御坐候折角爲邦御自愛奉祈上
候恐懼謹言

日本五月十七日

岩倉公　閣下　　吉井

一三　戸田三郎等願書「岩倉具視宛」　明治五年五月

微生某等頓首再拜白方今
皇國御維新ゟ時に當り某等寓留すること已に數年頃來追々御内政ゟ御改
革風俗ゟ變遷を遙に拜承仕候一喜一憂啻のみならす然れども其事實を覈

明にすること能わず徒らに焦心する而已近頃伏聞
天皇陛下　新に閣下等に詔し歐米諸國に特命全權使たらしむ某等竊に惟
るに是誠に
皇威益御皇張之御盛擧と奉祝候付ては一二之愚見をも獻言仕奉國萬分を
盡すの時也と乍恐　閣下等之御來英を企望一日三秋之思に消息仕候處御
着米以來既に半年餘も御遷延御前議御搖動も有之候哉其間紛々之風說等
も不堪傍聽旁區々婆心難默止終に左之件々不顧潛越獻言仕度千里之大洋
渡海仕候

第一策

米國に於て諸事御決定無之最初御奉戴之　朝命御一貫速に歐洲に御渡
海各國に之御使命御濟被遊候儀其利益顯然と奉存候第一最初　朝命御
奉戴之御趣意貫徹各國に對しても我國憲顯れ可申第二條約改革之時に
當て遠慮を十分に爲し事を寛裕に處し國是を盡す事を得且條約折中斟
酌之權自ら我れに歸し可申候第三には條約改革之後甲之國之ヶ條は乙
之國に之ケ條と或は反對齟齬する等之患可無之候因ても是を上策と爲す
此策に出る時は實に　國家之大幸無此上と奉存候今此策を行ふに二法
あり
其一於　朝廷前議御確定更に　朝命を以て最前使命之旨を體し早々各
國へ御渡海之御指揮有之度尤此微意を大使御採用に相成候はゝ其趣意
及情實等大使より急信を以て御奏聞新に其　朝命を賜り候樣御願被爲
在度候事
其二歐洲各國に之御使命も余り遷延に相成候に付大使最前御奉戴　朝
命の手續を以一先歐洲に御渡海有之度候事

第二策

萬一是迄御行掛之次第に因り前議難相行節は使節　朝命御輕慢之筋を
以　直に御呼返しに相成度然る時は固より使節　朝命御輕慢之罪を御

咎め無之ゟは　國憲不相立且外國ゟ對し御外聞にも關係仕候事故是非其人を黜退し更に一兩人御任撰最初之　朝命を以各國ゟ御差出度候事此策に出る時は數人を罰するとも　朝憲相立且後日條約改革之節之を增減するの權自ら我に在り彼是齟齬するの患なからん故に此策を爲す不得止此中策に出るとも亦國家之幸と奉存候

但し此策御採用に相成候はゝ大使より朝廷ゟ其輕慢之筋御謝罪且御呼返しに相成候樣其情實御仰上度候事

第三策

今日米國に於ゟ合衆部政府と條約改革調印在る時は我他日各國御交際上に於て不測之患を生せん且先年來條約中何れ之國にゟも一免許を與る時は他之國ゟも同樣可許之ケ條有之此條に因る時は今一旦米國之望處を許す時は歐洲各國ゟも同樣之を許さる事を得す其上各國は各々其利益とする處と申立其權自ら我に有る事を不得就ゟは彼是齟齬紛亂其害實に不可測と奉存候故に此を下策と爲す決ゟ此策に出るへからす然るに今使節之御目的は多く此下策を行ふに被爲在候樣奉伺候若不幸にして不問此下策を行はさる事を得す萬一事既に不及不得止此策に出ると雖亦豫め其後患を防減する之策無かるへからすと奉存候

後患を防く策

昔時孟子始至於境問國之大禁然後敢入西洋有名之諸大家も亦皆曰外國人一度我彊內に入る時は其留在中は則我屬民也と皆是外國人我彊內に在る時は必らす我法令に從ふへきを證するに足り「西洋各國尤尊奉する所之所謂公法なる者に候其間毫髮之疑を容れす此を以見る時は東西古今其人種時勢遙に異也と雖も其道は則一のみ然は各國獨立平行權理之由て起り公法之由て立つ所之者則是也故に此權理は其國之大小强弱を問はす各國自ら固有する物にして又之を外に待たす今や赫々我神洲獨此權理を保全する能はす却ゟ歐洲之一小邦に劣る事甚し開闢以

來未曾有之國辱臣子之罪無大焉苟も臣子たる者當に痛哭憤激嘗膽伏薪上下一心之を雪くを以專務とすると秋也況や今此勢にゐ彼に一歩を讓る時は卽ち其一歩丈我國辱を增加する也豈臣子たる者忍敢爲乎「然と雖も我か此權理を失する事一朝一夕之故にあらす之を回復するも亦一朝にして不可能只漸を以宜爲之夫我國民は柔順良樸不好訴爭其法律も亦自ら閑易或は先於粗鹵我俗吏亦隨ゐ事に經驗に少し彼洋人は梟奸不羈其好訴爭其法律も亦自ら緊密或先於繁苛其上乍恐　朝廷御維新御政基未全　號令法禁未全人心恂々未全定當此時我無經驗之吏其閑易粗鹵之法律を以彼狡黠好爭之人民を制せんとす誠に難き而已にあらず却ゐ我良民を害し我政を輕蔑し傲慢百出終に國憲不立國民憤怒其災害得不可言現在清人之災害を受も亦皆之に由る前車之轍豈不爲我戒乎方今我急務は則「先つ古先王之道を以基礎となし漢歐諸國之良法を拔萃し萬世不拔之　朝憲を起し內外之人民をして其不拔之　朝憲有る事を知らしめ

其司法之理政を緊密にし我吏民漸く此に慣習經續し假令狡黠之夷有と雖も其伎倆を擅にする事能はす」而后其已に開たる港々の外人司法之權を握り果ゐ我法之彼黠民に能當る哉否を察し稍々又之を斟酌修補し然後漸々我國內を開き終に全國外國人往來するとも我國權を維持し我良民を保護する事を得內外萬民共に業を安し大平を樂むに至らん是れ我目的とする到底と奉存候」然れ共若し卽今急速に此を欲し其廟算未全立其法令未全密人心方向未全定彼れ梟奸を張擅するの際あり我れ國權を護守するの術なく其實なくして其名を貪り頓に內外人をして相近接せしめんとすれは恐くは啻に其之を駕御する能はさる而已ならす則又我朝憲を亂り我國民を害し我將に急進せんとする所の道を妨け却ゐ半途にして先墜一國人民之災害將に不可言終に噬臍不及萬世之下爲天下之笑先王之羣靈に對し奉る不忠之罪萬死無所逃上　帝より各政府に賦與する所之人民撫育之務を失し其罪　皇天后土眞に不可容某等竊に之を

想像し實に苦心煩腦膽寒栗寢食共に不易罷在候某等思らく卽今我國を一歩にゐも外國人へ擴開するは其名は益進みたる樣なれとも其實は是を妨る也故に誠に深く國家を憂速に我固有之權理を挽回せんと欲せは無他唯我國權をして十分自由にあらしめ束縛せられず成丈けは外國人をして我內政に關係せしめす成丈緩々我國內を整理するの外更に無奇術此に因て左之件々は今度條約御改革之時に當り最緊要之事と奉存候

第一項
內外人雜居許すの約を爲へからす

第二項
外國人居留地一歩も擴充するの約を爲へからす

第三項
外國人國內通行自由之約を爲すへからす

第四項
港を增加するの約を爲すへからす

第五項
輸入出之稅增減之權我に歸すへき約を爲へし

第六項
我國之罪人は何れ之地或は家及寺院等之內にゐも必らす逐捕すへき約を爲すへし

第七項
若し外國人免許なくして其開港地彊外に出て我國法を犯す時は何國人に係らず屹度我國法に處すへき約を爲へし

第八項
我國民或は罪を犯し外國へ逃亡致し候節は必らす其國政府より其罪人を直に逮捕し我に渡し又外國之罪人我國內へ逃亡致候時も同樣我政府より處置すへきの約を爲すへし

右八項各其利害得失あり宜く御研究可被遊候右上中下之三策は此度某等合議仕憂苦之餘り不顧固陋不憚忌諱啓而獻言仕候何卒此上は其寸忠を憐み其潛越之罪を恕せられ御垂聽被爲在度偏に奉歎願候冒讀尊嚴惶惧無已

明治五年五月

戸田三郎
川北義二郎
芳山五郎之助

右大臣兼特命大使岩倉公閣下

一四　大原重實書翰「岩倉具視宛」　明治五年六月十五日

皇暦四月三日洋暦五月十一日御認御書翰皇の六月五日洋の七月十一日相達畏拜見仕候

聖上益御機嫌克御重被爲遊恐悦に奉存候　大使公御始御列倍御安泰恐悦に奉存候内地益御寧靜御留守宅老公御始御一同御安泰御安慮候樣奉存候隨而弊宅老父始無事小生儀も以御蔭無異奉職罷在畏存候乍憚御放慮候樣希候陳は昨冬差立之書狀去三月廿日着御一覽下賜縷々御細答之趣何共恐縮畏存候實に御多忙之内御直筆を以御答賜何共恐入小生之微志貫徹仕候段深々畏存候御留守宅之儀も懇々被仰越御老人方之儀御痛慮御尤に敬承仕候小生儀も時々相伺何れも御安泰にて緩話申上畏存候中君にも御歸京後御安泰旭君御安泰御歸京に相成相伺候處御氣の張にも被爲有候歟格別御惡敷御樣子にも伺はす兼而伺候よりは御輕き御樣子にて安心仕り省中より横文新聞紙抔差上御覽にも相成居候樣之事に有之候處右御病根は何共醫者も診察致兼候樣子之處全瘰癧と申事にて南校洋醫に御切らせに相成一時は少しく御快御樣子にて右診察も馬にて御通と申事にて實に御盛なる事感入候處何分にも御大患之事故追々と御痛强く大に御疲勞にて先月廿八九日頃には餘程御困却之御樣子御家

内御一同にも大に御配慮有之小生にも誠に御案し申上　尊君之思召之
處をも恐察仕兎や角と申何とか宜敷治療もやと存候處此四五日前より
大に御快御樣子御食事も相勸み御保養の爲折々御船行も被遊候御樣子
此節はあさくさ御出養生場御設に相成候最早御案しには不及義實御大
患とは申しなから何分御壯年之義必々不遠御快復無疑と存候折角今日
迄に御勉强も水泡に屬せんとせし事殘念無限存候乍併折能　尊君不圖
も御出會にて御歸朝に相決候事誠に御天幸と存候誠に盡忠之御報と奉
賀候八千丸君には實に御壯健日夜御勉勵追日御上達之趣爲國家奉慶賀
候嘸々御喜悅之事と恐察仕候乍序申述候小生豚兒も頃日より獨逸學入
舍申付令子之後に從ひ報國の一端とも仕度と存候
一條約改定御委任に付兩副使歸　朝之義に付云々被仰遣實に御沙汰之通
り愕然と致し夫に付種々議論相生し數ならぬ小生迄も深痛心仕候事に
て省中一同にも兼ゑ昨年　尊君御見込通り諸國御一周御歸朝之上御改

定に取掛り候義此程之御上策は無之に何故ケ樣御異變に相成候事やと
種々議論も有之中々不相決事にて實に　尊君御心中御察申上一向御案
申居候處追々と諸說落合去月十七日副使大辨務使にも出發に相成先以
御都合克安心仕候乍併實に事々遷延其地にては實に御報御待兼に被爲
有候事と存候最早是よりは十分之御權力を被爲有御談判相成候儀實以
御心配は奉察候得共何卒十分に御盡力御都合克御取極早々御歸朝之程
翹首奉待候洋の五月初旬頃既に暑氣八十度餘にも相成候旨內地は中々
漸七十度前後に有之當年は殊に涼き方にて此節六月初旬に八十四五度
位に有之候洋の七月に至候ては大暑各々御避暑候故夫迄に御談判相濟
歐國ゟ御渡航相成度旨御尤に存候既に昨冬蘭公使も右樣之事申居遲く
相成ては西洋各國の王皆夫々ゟ避暑に出遊候故面會の出來かぬる事も
有て殘念故何卒蘭國ゟも暑氣に不相成內に來臨有度抔と申居候處丁度
其頃に相成殘念之至に候乍併未た大辨務使も其地に着不致着後談判相

始り詰り歐國ゟは八月頃に御渡航に可相成左候へは却而御都合と存候
何も御運次第に候乍併實にケ樣長引何共御徒然と奉恐察候只々是より
之御都合夫のみ奉萬祈候

一異宗徒之義に付云々被仰越右は先便々毎に申上候通り何分にも難事件
然も毎度處々にて其事の訴訟起り誠に痛心之至に候箱館開拓使魯教師
との事件も先々穩に相濟全是は種島卿之盡力談判の都合よきより候事
に候最早右樣行違之事は出來不申夫は御安心に候得共終に異宗の内地
に蔓莚候樣相成候は目前之儀實に憤怨之至に候夫に付申上候此度夫々
異宗徒者御寛大之御處置に相成候に付新聞に一は　皇帝の改宗し玉ひ
し事一は岩倉氏日本全國に西教を開んとする望みを言出されし事を證
するに足るべき者なりと右虛說は固より論する迄もなき事なから右の
如くなりたれは彼に於ては彼是はなくなり可申候へとも實に大變に候
皇帝の改宗岩倉氏の西教を開くとは餘り甚敷事に有之内地神祇省被廢
教部省被置右にて十分邪防の御手配も行屆事ならは又々可然候得共兎
角議論のみ强く又省中一變革福羽は免職にて宍戸を大輔に黑田東京府參事
を少輔に被任候福羽の說は神佛教混淆と云左院の說は是非神道を首に
立て行くと云事にて遂に其說の通りなりしなりと云風聞なり如右論の
み盛んにて更に實効とては不相見ケ樣の事にて歲月を送り候内には彼
の教は盛んに入不可防に至候と實に歎息之至に有之候只今の國是は異
教を法と刑を以禁せず教を以禁すと云は至極の義にて一言の申分もな
く候得共論はよくて實事の不擧は實に遺憾無限事に候何卒可然御勘考
有之度と奉希候

一此八日九日頃より唐太堺境之談判相始り種島卿と魯公使と日々出會尤
内々談し之由にて都合惡敷方にも無之噂に内々承候

一當省中も此節奏任之者夫々昇進楠本も新潟縣令に被任候後省中の分課
も夫々變り判任の者も下官の者は昇進致させ以來至極折合よく何れも

勉勵精勤致し成丈少人數にて勤る樣との卿の趣意故他省に比し候へは少人數其上外國行の者半に及ひ實無人故小生輩迄も相應に御用有之實に有難存候乍併不相變鈍物御用に不相立恐入候事に候卿も多分所勞にて其上交際上大事件に日夜焦慮被爲候故訴訟向其餘細事は大小丞に多分委任にて宮本花房重に取扱其外は石橋子安平井小生抔僅五六輩にて事を執居候故自然不行屆も可有之候哉と一同痛心仕居候此節暑氣向ひ候に付正院は八字出勤一字退散他省は十二字に退散之省も有之候得共外務省は九字出勤二字退省之處多分五六字前後に退省仕候何れのものも勉强御察し奉願候

一魯國皇子愈當月下旬歟來月初旬には定て到來可申に付接待御用掛伊達從二位幷に宮本小生ゟも被仰付候種々饗應之手都合仕居候得共何分御國未た十分之開化に不至大使公始を米國にて饗應致候樣には中々以十の一にも不及誠以遺憾之至に存候漸軍艦を以長崎迄出迎我内海誘導候丈の事は出來漸安心仕候右出迎は伊達從二位に被仰付候何卒此上は早く渡來にて首尾善く御饗應相濟歸國に相成候樣に念入候事に候是前英王子渡來の節とは追々人氣もよく右は安心に候得共右樣草創之節の振合にも參らす追々開化の進に隨ひ夫々御饗應振も不行屆ては不相成色々心配仕候事に候

一主上御機嫌克御巡幸の日誌之通に被爲有（日誌は書記官ゟ廻候）實に聊の御差障りも不被爲有恐悦無限候兼ゟ御極りの御日取は左の通に有之候

五月廿三日品川御發艦　廿四日鳥羽　廿五日廿六日同所御泊　廿七日紀の大島　廿八日大坂　廿九日晦日六月一二三四五六日は同所又は西京之間に御泊　六月七日神戸　八日同所　九日多度津　十日十一日同所　十二日姫路　十三日馬關　十四日十五日同所　十六日御發　十七日十八日十九日長崎　廿日熊本　廿一日廿二日廿三日同所　廿四日御發　廿五日鹿兒島　廿六日廿七日廿八日同所　〆日數都合三十六日也

一去五日太后皇后濱殿より御乘船隅田川邊御舟行細川邸にて御小憩兩國橋北より御上陸本町通り馬車にて還御追々開化之御樂しみ恐悦に存候皇后には來十七日御出輿にて宮の下溫泉に湯治に被爲成候小田原迄馬車にて被爲成候旨三週日御滯留之由に候御留守中御保養御健康に被爲成　皇胤を被殖候儀と奉相慶候

一スミッよりフラットに之書狀譯文寫被遣早速卿にも入覽候處大に感被爲其他にも內々相見せ感入候事に候其內　皇國の國風を論し人情を評候義誠面白く報國之赤心を有し封境に死するを以て榮とす抔十分之褒詞存候乍併此節之人情にては開化とやらの口癖只輕薄にのみ流れ候樣相見以前の義氣慷慨を唱る者もなき樣見に右の說に負く樣にて歎息仕候何とか挽回致度者に有之候スミッ義も日々相勤め卿其外諸省の質問を受大に御用に相成珍重に存候去五月廿九日は西洋七月七日にて米國建國の日に付卿始奏任官何れも同氏宅にて饗應有之小生も相陪候定而米國にては十分之祝にて大使公御始御饗應御受之義と種々想像仕候

一御巡幸御日割前文之通相認候處更に御改に相成

六月七日午後第五字大坂御發艦　同九日馬關　十日十一日同所　十三日長崎　十四日十五日同所　十六日熊本　十七日十八日同所　廿一日鹿兒島　廿二日廿三日同所　廿六日丸龜　廿七日廿八日同所　廿九日兵庫　七月朔日二日同所　五日熱海　右の上御都合次第御還幸之旨に有之候

一前文異宗之儀　尊君異宗に御荷擔之樣新聞に出有之候處此度鮫島倫敦の新聞差越候には又散々に　尊君之事を罵り有之候實に取に不足事なから申上置候小生右を心配仕候處卿の說に是式の事を驚く故却而大事を過と被申候成程尤之事と存候

一主上御眞影御拜領之儀條公に相願候處早速御厚配にて主上皇后兩影宮內省より賜候間此度幸之便に付爲持差上候御拜受候樣存候且又各國重職に

被遣度に付十葉計御願之儀右も申入候得共各國重職ゟと申ては夫々壯嚴も入候事故急には出來難との御事に候間此段申上候若又是非御入用之儀に候はゝ猶又被仰遣候樣存候只今之處にては强て申願候事も致難く御諒察願候右御影此外に大なるの竪二尺横一尺計有之候箱入のも被下候得共何分大きくして差上候事出來難く候に付中君と御談し申上右大の分は御邸に御預りの事に致候間御承知希候　尊君御洋服之御影拜見仕候處肉食之御故か格別御肥被遊候樣伺御健康之儀恐悦爲國家奉賀候御散髪も御尤小生儀も此程より散髪に致候

一御拜領邸之儀朱引内に付追ゟは御上邸に可相成は不得止事に候得共此節工部省にて入用に付頻に上地に相成候樣申立候に付右上地之儀内々御沙汰に相成條公より小生ゟも御申にて御留守宅ゟ相伺候樣との事に有之然處中君よりも御歎願に相成猶又小生よりも申願尤條公に於ては兼ゟ　尊君より御願之次第も有之大隈にも同樣精々御心配にて先々其分に相成工部省申立も相止候間先は御安心之樣存候　尊君思召は如何難計候得共何分御老人方且御多人數之儀今俄に御轉宅も實に御留守中御當惑之儀と恐察仕候處　尊君御歸朝迄は右之御沙汰も先相止於小生も安心仕候右幸便に付申上候

自餘別段申上候程之儀も無之擱筆候其地此節之暑氣は如何哉内地は此兩三日より大暑難凌事に有之候實に御不慣之土地之暑氣如何と御案し申上候萬々御自愛之樣伏奉冀望候匆々頓首百拜

壬申六月十五日

右大臣岩倉公御侍史中

大原重實

一五　岩倉具視書翰「木戸孝允等宛」明治五年七月十五日

御相談に及ひ置候別紙書記官一同へ申渡候に付ゟは御一同共右規則を履

行致し候は勿論に候得共猶左之條々御打合申度候

一別紙第二條最要之處と被相考候就ては交際事務及ひ享宴接待等をはしめ應接之始末は勿論直に公務局へ申聞可爲致取調且理事官其外生徒等より願伺等有之候砌一通り示談は可承候とも公務局之手を經す候ては決て許可之義無之樣致し度候事

一御一同公私共出行之節は相互に順席之一人々々に報知可致置尤差障り之節は順次を以て報知し且其段は公務局へも爲心得達置候樣致度候事

但從者を以て往來可致事

一食事之節は可成丈一同會食し其砌を以て諸事御相談候樣致候はゝ便宜たるへく存候且到來物等之義此砌り御互に申合すべく候得共都て公務局にて取扱せ其品柄は別段傳覽に及はす互に煩を省候樣致度候事

西洋八月十八日

岩倉具視花押

木戸孝允殿
大久保利通殿
伊藤博文殿
山口尙芳殿

一六　福地源一郎等書翰「岩倉具視宛」　明治五年七月十七日

使節御發途後船中及桑港以來書記官一同公務取扱候に付或は分課を賦し或は當直を定め種々の施法取行候處往々不都合之事件を生し遂に終生致さゝる事ありと雖とも中漸く取續き候者は桑港滯在中に相定候當直のみに御座候既に華府に於ても大副使分屬の法相立候處纔に數日を過きすして相破れ候始末毫も實效を奏不申蓋し其弊の由て起る所以は書記官一同都て大副使五名の用に供すべき者なるに一旦各箇々々の附屬と相成候を以て其職務を限り候事と大副使の內時々其附屬書記官耳を御使役相成難

くして他附屬に御用被仰付候事等に由て起る者と存候然れとも是固より勢已むを得さるより起て彼我ゝ區別なく御採用に相成候樣に至り候者右に付愚案仕候には桑港滯在中施行仕候當直に從ひ書記官一同を分ちて二人つゝ毎日當直を定め其一日中は外人ゝ接待大副使への申達中外の雜務等盡く之を引受けて其分課の書記官に通達し都て其一日中所起の事件百般朝より夜に至る迄此二人の職務と心得其他の書記官は毎日定規の如く朝十時夕四字迄是又各其分課通譯公文日記雜務等を心得候者にて假令は大副使招待巡覽等ゝ節に當ては當直の三人是か周旋を心得大副使に通辨の者を分賦して其用に供し又書類接待等の事あれは此二人又其課の者に布告して大副使の御用相欠けざる樣早速差出さば決して御差支に相成申間敷譬へは分屬の書記官を御決めに相成候とも此書記官盡く其他の分課を所持致居候得は必其分屬する大副使各箇々々の御資用に早速に趣き難き事屢有之べく然るときは勢誰彼の區別なく御引用に至るを得ざる可し是其名ありて其實なき者にして啻名實の反對のみならす公務實際に多少ゝ御不都合可有之既に其弊分明に御座候故簡に就き事を辨候方至當と存候右謹白仕候

明治五年七月十七日

福地源一郎
小松壽盛
杉浦仙藏
林　董
大原令之助
安藤忠經

大副使閣下

一七　岩倉具視書翰「木戸孝允等宛」　明治五年七月廿一日

（△印は岩倉具視の書入なり以下同）

△八月廿五日　大久保　鮫島　伊藤　山口　具視　相談の事　木戸　日日　具視申入管　寺島は鮫島より申入管」

一國書寫差出之事

右は一應アレキサンドル歟バークスを内へ申入爾後書狀を添書記官に持參可爲致候事

一女帝謁見之事

一外務卿其他官員饗宴之事

一各國在留公使饗宴之事

一夜會之事

右は謁見後早々取計可申事

△○バークス内話如何の事」

一國書之趣意に基條約之義談判振之事

一米國にて條約談判之始末はなし振之事　但海外にゐ條約取結之權御附與之義御國にゐ御達し相成候廉とも御說話振之事

一馬關償金談判振之事

一宗旨之儀に付申出候砌答振之事　△在留公使ゐ申達し條約云々の事前後相違の事也」

右は使節一同寺島鮫島兩辨務使同席評議之事

○

一バークス、アレキサンドル、アストン同食之事

一有名人々出會可然之事

右は此頃中便宜次第取計候事

右御相談および度候間明廿二日第二時對客處へ御集會有之度寺島　鮫島　ゐも申越候也

壬申七月廿一日　　具視

木戸殿

大久保殿

伊藤殿
山口殿

△
一伊藤大侍醫願之事
一御雇入の人體（宮内省婦人）　文部省教師　海軍省教師其外數人
一法律家御雇入の事
一鮫島東伏見宮兄弟御願之事
一生徒取入りに付外國人云々并鮫島青木の事
一南貞介願の事　右樣の事自今辨務使委任之事
一小室願の事
林　等願濟の事
一伏見宮息の事」

一八　三條實美書翰「岩倉具視宛」　明治五年七月廿八日

新涼之候　主上御機嫌克臨御被爲遊　兩后も御機嫌能被爲渡候段奉恭賀候閣下御壯剛御盡精可被成奉遙祝候然は此般渡邊洪基歸朝御附託之尊帖二通落掌奉拜讀猶亦同人ゟ御傳言之趣も委細直聽仕其地に於ゑ之事情等も詳に承先以奉安心候實に御大任之上彼是意外之御配慮も被爲成御義千萬御察申候大久保發錨後何等之消息も無之如何と想像仕居候處洪基歸國米國談判も結局相附歐洲に御發途可相成趣ライス氏之傳說を承り申候段同人より致承知候國務卿御談判之次第も書類御廻し披見仕候彼是御困難之義御苦慮之段想像仕候最早此頃には洪基發途後大久保伊藤着後之御都合も御報知到來可仕歟と屈指相待居申候「既」御着英之趣は一兩日前電報にゑ相達同國御談判之御都合如何哉今般條約改正之事に付ゑは色々歐人之物議も有之候事故甚懸念に不堪候幸に好都合に御坐候はゝ實に　皇國之幸に御坐候萬々一不都合に御坐候ゑは各位之御當惑は勿論我朝之榮辱に

も關係仕候次第に付偏不都合無之樣日夜祈念仕居候扨本朝平穩更に異狀
も無之御安心可給候政府中何も無異奉職勉勵仕候西鄕參議にも元帥近衞
都督に轉任參議兼任被仰付候此儀は近衞兵之居合も少々心配仕候事情有
之同人拜命仕候には極て居合相付候見込御坐候ゟ被仰付候事に御坐候參
議之方兼官に相成候得共勤方之處は是迄之通にゟ更に相變り候儀に無之
唯々體裁而已之事に候間必御安慮可被遊候「近來は月中三度延遼館に於ゟ
三職諸省長次官集會仕候事に相定申候右は兎角官中之氣脉情實相通不申
ゟは不宜候間右之通取極申候至極一和之道にも相成都合宜御坐候
「方今政府會計頗告急候姿にゟ大藏大輔にも百方盡力苦心仕居申候就ゟは
此節正院幷諸省も悉定額相定專冗費を省き候事に評定仕申候」乍併決して
御心配被下候樣なる事には無之必らず目途も相立可申候に付吳々御懸念
被下間敷候　主上御巡幸總て御都合宜還幸被遊大に人心も安堵仕殊に
上にも御機嫌克御英氣御發暢爲國家欣幸此事に御坐候如西京は此般之御
巡幸にゟ至極人氣も相變大に開化に趣き申候由に承甚以大幸と存候其他
九州筋地方にも余程感激仕候よし猶來年にも相成候はゝ東北諸州にも御
巡幸被爲有候樣企望仕申候猶內國之事情等委細申上度存候得共格別之義
も無之先以當時之要用大概而已申陳候萬々後音を期拜啓可仕候仍早々如
此候也

七月廿八日　　實美

全權大使岩倉公

二伸大久保木戸伊藤山口等へも宜御傳聲可給候時下御自愛專要存候大
亂書御推讀奉願候也

追啓先般大久保歸朝之節伏見二品宮御洋行相成候に付獨歐兩國何之
方可然哉得失互に議論も有之候間實地御視察之上何れとも御爲宜き
方取定申度候間御報答被下候樣奉希度候

一九　大原重實書翰「岩倉具視宛」　明治五年七月三十日

聖上益御機嫌克臨御被爲遊恐悦奉存候　大使公御始御一同御安康御旅行恐悦に存候内地益御安靜御留守邸老公御始御一同御安泰に被爲有候御安慮候樣奉存候隨而拙宅老父無事小生儀も以御蔭無異奉仕罷在畏存候乍憚御放慮之樣希候

内地　主上還幸後御機嫌更に御變りも不被爲有數々吹上にも被爲成調練之御指揮なと被遊御健康之御事實に恐悦此事に候必御安心候樣存候此節は外に何たる事件も無之可申上儀も無之候渡邊少記去廿一日歸朝其地之模樣種々話有之尊公御配慮之程奉恐察候御傳言之趣畏敬承仕候實に遠方に出候ては人心も不被計もの御痛心恐察仕候乍併更に御變りも不被爲有旨恐悦此事に候去十四日御一列倫敦御着に相成候旨電信にて承知仕御安泰之由恐悦に存候存外早く御渡航に相成華府に於ては十分之御談判も不被爲有樣に伺候如何哉に存候此節は英國にては御談判如何之御模樣にやと只々御案し申上候夫に付蘭公使も國より被召歸昨日御暇乞内謁見相濟候何卒此上之御都合御談判相調一日も早く御歸朝其のみ御待申上候此節横濱港にて李露國買奴裁判起り卿にも特の外配慮有之候處先々結局に相成候右事件は實に不容易事にて人々種々之說有之誠に案られたる儀に候得共先斷然と處置相濟候得共此異論之末又々如何可有之哉と痛心仕候乍併卿には斷然と不動被居候右一條は委曲書記官迄申遣候儀因贅言不仕候新聞紙には囂々と可有之猶御聞之樣存候

先達差上候大東寶鑑少々相違の廉も有之改刻出來候に付御慰迄に呈上仕候令孫御儀も頃日は追々御快御樣子御遊行抔も御隨意に被遊候必御安慮之樣存候

内地去十九日暴風雨後追々凉氣相催候其地は如何有之候哉何分御大事に御自愛有之候樣奉冀望候匆々頓首百拜